# 羊 歯

第29號

1993（平成5年）

新ハイキングクラブ 横浜支部

# 志多

第２９號

１９９３（平成５年）

新ハイキングクラブ　横浜支部

# 『しだ』第２９号発行にあたり

昨年７月29日の支部委員会において、「しだ」第29号発行のことが決まり、支部ニュース９月号に、原稿募集のお知らせを出しました。早い方は９月末には原稿を寄せて下さいましたが、集まりは悪く、年末まで締切りをのばして待ちました。そして、最後の手段として、おもな方々にトクソク状を発送しました。締切も今年の１月20日まで延ばした結果、ご覧のように21名の方から22編の力作が寄せられました。お忙しい所、本当に有難うございました。

当支部もいや応なしに、会員の高齢化が進んでいます。山行の安全と、楽しい山行を続けるために、会員相互の親睦についても、親しい中にも礼儀ありで節度ある行動をお願いいたします。

梅花馥郁の季節も過ぎ、３月末にはもう桜花蘭漫の候となるでしょう。山の草木も冬眠から覚めて、私達を呼んでいます。体調に充分気をつけ、山行に出かけましょう。そして心に残ったことどもを記しておき、次の「しだ」にお寄せ下さい。

ここに「しだ」29号発行に当たり、ご挨拶に代えさせていただきます

平成５年３月吉日

ＳＨＣ・横浜支部　　熊　谷　松　治

## 『しだ』第29号　目　次（1993）


発刊に当たり …… 2
目　次 …… 3
1，短歌・「常念山脈を行く」。 …… 古谷　芳子　4
2，島々から霞沢岳へ …… 飯島　和子　6
3，南アルプス　北岳に登る …… 太田　俊子　9
4，山の水　三　態 …… 小池　廣治　10
5，君看ヨ　双眼ノ色 …… 永井　和男　11
6，安全登山について …… 長谷川美江　12
7，定年と山と新ハイの仲間達（続編） …… 御園　培博　14
8，歩く日本横断に挑戦 …… 茂木　武　15
9，「キタダケソウ」に逢えた …… 北村　襄　17
10，新ハイに入会して …… 有山　好子　19
11，登れなかった森吉山と小又峡 …… 沢野　正明　20
12，'92　夏 …… 平沢　隆雄　22
13，素晴らしい知己を得た …… 山根　基照　23
14，山・山　ふたつの思い出 …… 石原　弘之　25
15，フイールド　サイン …… 芹沢　隆仙　26
16，私の失敗談 …… 山田　和子　18
17，安全登山のために …… 山本　一夫　29
18，山の想い出　二題 …… 祖父川精治　32
19，虹を見た …… 鎌田　善子　35
20，逝く秋に …… 佐野純一郎　37
21，百　名　山 …… 星野喜美子　40
22，嗚呼！．ガリ版 …… 熊谷　松治　41
23，横浜支部と私 …… 星野喜美子　43
24，　ＳＨＣ横浜支部の歩み …… 44
25，　支部山行記録　Ⅰ（昭和48年４月～55年３月） …… 熊谷　松治　46
26，　支部山行記録　２（　55年４月～平成４年３月） …… 星野喜美子　51
支部会員名簿（Ｈ５年３月　現在） …… 68～69
〖あとがき〗 …… 70
【付録】ＳＨＣ横浜『支部ニュース』第１号（1959年） ……
表紙および扉　題字 …… 早川　益雄
表紙レイアウト …… 三洋製版印刷（株）

短　歌

# 常念山脈を行く

古谷芳子

安曇野より仰ぐ常念高かりき
いまそ歩まむこの山脈を

みすずかる信濃の山を恋(こ)ほしみて
あかときの山に入りゆかむとす

恋人等の手とりゆかむかこの急登
五臓六腑を吐き出すごとし

登り来て合戦小屋のスイカ食(は)み
のみどに涼風渡り来(き)にけり

燕岳(つばくろ)の白き砂礫は夕つ陽に
鋭く光(て)りて吾が眼(まなこい)射る

眼下(まなした)の渓(たに)より霧の湧きくれば
背(せな)に射(しゃ)す陽はブロッケンを生(あ)む

雪渓に渡る風の冷ややけし
かき氷のごと雪を食(は)みおり

若き等のキスリングみて吾が青春
甦れども還らざるかな

対(むか)へ見る昨日(きぞ)越えにけり大天井(おてんしょう)岳
屹然として立ちにけるかな

すがすがしき少年等の顔登り行く
斯(か)くあるべしと吾れ思ふまで

こし方(かた)の一筋の道眼におさめ
うつし世歩むごとく峰越ゆ

這松はピンクの花つけゐたり
雷鳥親子に心あそばす

朝霧に濡れゐるコマクサ頭たれ
なだり響す風に揺れおり

累々と岩崩(いわくえ)の山常念より
まさやかなりし槍、穂仰ぎぬ

槍・穂高・後立山おしなべて
薄らかな雲におぼおぼとせり

星見むと小屋を出づれば天霧(あまき)らふ
明日の縦走阻むがごとし

渓よりの湧きくる霧にうつし身は
沈みゆくがに山を降(お)りくる

身の裡(ゆち)の澱(お)り一気に流さるる
ごとく思へり眼下(まなした)の激流

沢の音の頗(すこ)ぶる高し一の沢
天降(あまくだ)るなか降りて恙(つつ)がなし

過ぎゆきの常念山脈思はざる
友の個展の画に顕(た)ちにけり

# 『島々谷から、霞沢岳へ』

飯島　和子

北アルプス常念山脈の南端にある霞沢岳は、かねてから気になる山であった。槍、穂、の行き帰りに、樹林帯の上の岩峰群は、興味をそゝるに充分な山容を見せている。山頂からの展望は又格別であろう。いろいろ想像している内に、それならば島々谷から徳本峠へ、そして尾根から霞沢岳へと、登高意欲がわいてきた。

午前７時、新宿発あずさ１号に乗る。テント山行であるから、今日の予定は出来るだけ峠の近くまで入りたい。かっては上高地で清遊する人も、槍、穂の奥深く踏み込む人も、皆、この島々谷川を遡って行ったであろう。
島々橋は１６キロメートル余の峠路の出発点である。いつも車の窓から横目でみて通過する『徳本峠入口』の、木の大きな標示板の前に立つ、いよいよスタートである、胸がおどる。　道は第一歩から島々谷川と、ぴったり沿っておりすぐ足下に清流の響きが聞える。一時間も流れに沿って、歩いた所で食事にする、バイクの音がして、同じ方角から来た山廻りのオジサンが おもむろに云う。『そういう所で食事をしているのが一番危ないですよ!』、 腰掛けていた所は石積の基礎で背後の斜面は崩壊防止のため、モルタルが、吹きつけられているが、ルンゼのようになって岩くずがたくさんつまっている。一本とられたな、と思ったが、『石積の根本にいるから落石は、却って頭上をとびこしたりして…』 などと、負け惜しみをいった。二十分休んで再びザックをかつぐ。ひんやりした谷間の道を行くと北沢と南沢の分岐点で道は左折し、南沢右岸を歩くようになる。二俣には登山者が二人休んでいて、上の方の状況を教えてくれた。その少し前に、三人下って行ったので、 やはりこのルートに入る人は少ない。

紅葉は盛りを過ぎ、落葉の径は足底に快く静寂幽谷の世界にとっぷりとひたりこんでいった。谷川に掛る、朽ちた桟道梯子にも昔を偲ぶ風情があふれている。頭上からは、黄色いトチの葉が、ヒラヒラと舞い落ちて、黄金の絨緞を敷きつめたようだ。　わさび沢をこえ左岸に渡ると、大きな桂の木の脇に、ススケタ平屋建の小屋がある。１００年はたつであろうか、自然のままの、岩魚留小屋である。小屋に似合わず、若い当主の奥原氏にビールをもらう。小屋前の水槽に泳いでいる、イワナを注文すると『これは、今度の日曜日のお客の予約分』だと断られてしまった。ビールを買ったあと、小屋の主人から、テントは国有地内なので、指定地以外では、許可にならない、と当然の原則を持ち出されてしまう。この先でダマッテ張ってしまえばよかったかな。あきらめて本日は、この地を宿とする。

午前六時テントをたたんで、峠へと登り始める。道は幾度か流れから、はなれて、右へ登るので、尾根へのジクザクに、入るのかと思うのだが、更に流れに降りて、続いて行く。そうした繰り返しの内に、左岸山腹を横切ると、峠、直下にある最後の水場に出る。ここからおよそ一時間ジグザクの径は峠まで、一挙におしあげる。ザックの荷が肩にくいこむ、ハーハー、ゼーゼーがはげしくなる。頭上で、人の話声が賑やかに聞こえてきた。歩き始めて、二時間三十分、徳本峠に着いた。前日降った雪が穂高を白く雪化粧していた。
ジャンダルム、奥穂、吊り尾根、前穂、明神が、青空をバックにして殊更、趣き深いものがあった。谷筋に太く残る夏の雪渓とも、厚い白フトンを被せたような冬姿とも違う。岩肌に、お白粉をパラリと降りかけたとでも云おうか、実際に、この後、霞沢岳から眺めた、午後の時間には、この雪はほとんど、溶け消えていた。峠まで絵具箱を持ってきて一心に描いている人、熟年のグループ達等と皆満足していい顔している。小屋の主人に、テント代を払い重い荷物を預け、サブザックの軽装で、霞沢岳へ向う。峠から明神への路を二分程、下りた所に左へ霞沢岳への道標がある。重荷で登ってきた身には背中が軽くて何とも軽快である。峠の明神側は点々と紅葉の木が混って美しい。しばらく行くとジャンクションテラスに着いた。穂高の稜線が一段と高みを増して大きく迫ってくる。上から子供連れの人が下りて来た。奥さんらしい人が、右手の常念、蝶を指さして『あれは外輪山なの？』と聞いている『ここは火山じゃないよ』と夫。そんな会話をあとにしてなおも登る。十時ジャンクションピークに到着丸太が一本おいてある。こんどは南側の展望が開けていて、甲斐駒の左の方に重なって富士山が顔を出している。鳳凰三山、北岳と南アルプスの峰がはっきりと見える。左側に目を移すと、八ツ岳の長い山波、左下の谷は昨日歩いた、島々谷が深く長く続いている。ジャンクションピークからしばらくは平坦な疎林をゆく。径はその内かなりの下降となる、折角高度を稼いできたのに取り返されてしまうなどと思い乍らも、道の通りに行くしかない。小さなピークを、いくつか越すと鞍部につく、右手に前穂がみえてきた。目指す霞沢岳は樹林の間からかなり、遠くに見える、『対岸』ともいえる位置に、Ｋ１、Ｋ２ピークを従えて風格が良い。ナナカマドの赤い葉は散って実だけが秋の陽に映える。トリカブトの花の末路、この辺りはお花畑で苦しい乍らも、一ブクの清涼剤になっている。ヤセ尾根を渡るとＫ１ピークの直下の鞍部に出る。一休みの後急登が始まった。北面の道は雪が残って凍りついたり、とけて泥状になっていたり滑りやすく、木の根、岩角につかまり乍ら一歩一歩登る。徳本峠から三時間Ｋ１ピーク着。はるか下に帝国ホテルの赤い屋根が見える。

しばらく休んで本峰を目指す、ハイマツの岩綾を越えあっけなくＫ２に着く、憧れの霞沢岳２６４５ｍだ、バンザイ。遠くは白山、南、御岳、乗鞍、笠、３６０度の展望を楽しむ。岩の上に足を投げ出し、秋の陽差しを顔に受けてしばしまどろむ、ぜいたくなひとときだ。山頂に４０分、貴重な時間を過ごした。

下山は常念山脈を見て進む、頭の奥、心の奥まで、この光景を焼きつけた。五時前、徳本峠のテントサイトに帰着。汗は殆どかかなかったが、一日とにかく長い道のりだった。ベンチにかけて島々谷を眺めながら、朝六時に岩魚留を出てからの霞沢岳往復、健全な脚に感謝といった気持である。夜、となりのテントのラジオから、立山で中高年の多量の遭難のもようを放送していた。

初雪と紅葉と３０００ｍの山、一番こわい季節である。朝八時テントをたたんで出発。途中の枝沢でさっぱりと顔を洗って、口紅をつける。今日も天気だが、昨日よりも雲は多い。嘉門次小屋に寄ってイワナを食べていこうかななどと思ったが、歩く人の多さを見てその気がなくなり、一路、上高地へ向かう、シーズンも終わりに近付いて観光客も多く河童橋は鈴なりだ。一刻も早く梓川対岸から霞沢岳を見たくて、歩をゆるめずに進む、橋のたもとで、それは目の上高くに見上げられた。　あの頂きまで登ったのかと思うと、登頂のときとはまた別個の感慨が湧いてくるのだった。ウェストン碑まで往復し途中飽かず眺める。誰もが良く見る穂高と反対側を地図を出して、眺めているので、すれ違う人が、おかしな顔で見ている。充分満足して、タクシー相乗りで松本駅へ向かう。中の湯あたり、霞沢の出合いが見えないか、その奥に、岳はのぞき見られないかと、車の中からも、しつこく見続けていた。

平成元年十月八～十日歩く。

# 南 アルプス北岳に登る

太田俊子

1992年７月19日より21日、２泊３日で待望の北岳に登った。１泊余分に泊ったのは、スバラシイ天気のために足留めされた感じで、北岳の魅力を満喫した。わが国第２の高峰だ。夢に描いていた北岳草に、巡り合うことが出来るだろうか。

１日目、お池小屋に宿泊、小屋は新しく木の香が漂い、まるでログハウスの教会のようなイメージ。

２日目、二俣八本歯のコルを目指す。バットレスの大岩壁が目前にせまり、その威容に圧迫感すら感じる。このバットレスは、日本有数の岩壁だとか、本当にスゴイ。今年は例年になく雪が多く、雪渓の上を一歩一歩リーダーの後を慎重に進む。雪渓が終りに近付くと、あとはザレたジグザグの道、吊り尾根上の八本歯のコルは間近だ。ハシゴ、ガレ場を登りいよいよ北岳山荘への分岐だ、時間に余裕があったので、明日登る予定の山頂へ登る。道すがら、沢山の草花が咲き乱れ、そのスバラシさに感嘆する。ハクサンイチゲ、四ッ葉シオガマ、岩ベンケイ、ケマン草、テナガチドリ、チョウノスケ草等など、でも残念なことに、北岳草にはまだお目にかかれない。何処に咲いているのだろう。

３日目、山荘の人に、北岳草の咲いている場所を教えてもらい、朝露を含んだ白い花に出会うことになる。とても清楚な花で、丈も短く、岩にへばりつくように、朝の光をうけて咲いていたる。言葉にならないくらい感激、しばし佇む。例年だと時期的に遅いようだったが、今年のように７月中旬まで咲いているのは、珍しいとのこと、何と、ついているのだろう、一層嬉しくなる。

頂上の眺望もスバラシく、中央アルプス、中部山岳の主峰、北アルプスの連山、そして仙丈岳の雄姿が目のあたりに聳え、いつの日か、仙丈岳に必ず登ろうと心に誓う。帰りは肩の小屋より、草すべりを経て、１日目に泊ったお池小屋へ戻る。

広河原より後を振り返り、北岳の雄大な姿にあらたな感激を覚え、南アルプスの魅力がわかるような気がした。1992年の夏山登山、私の心に残るスバラシイ北岳登山だった。感謝々々……。

# 山の水三態

小池廣治

昭和61年入会以来、諸先輩のご指導で、多くの貴重な山行を経験させて頂きましたが、「水」についての思い出を書いてみたいと思います。

銘水 …… 東北山行シリーズで、虎毛山－高松岳に登ったとき、山伏岳の下りで湧き水に出会いました。滾滾と湧き出る清水のところに、なんと、柄杓が置いてあるではありませんか。渇いた喉に、その水がなんとも旨かったこと、甘露とはこのことかと思い、東北の飾らぬ人情を感じました。

命水 …… 同じく飯豊連峰山行のとき、門内岳から梶川峰コースを下ったのですが、飯豊山荘の赤い屋根が見えているのに、おりてもおりても近付かない、難降下を続けているとき、私自身も真夏の陽光の下で、喉がからからでしたが、山道に座り込んでいる若者から「水はありませんか」と、弱り切った声で聞かれた時は、ガダルカナルや、インパールの敗戦避行もかくやと思われ、ギョッとしました。幸い同行の人が水を分け与えてくれたので、ほっとしましたが……。

迷い水 …… 入会前後に山にはビギナーの会社の先輩を、鍋割山に誘ったことがあります。後沢乗越の手前で、沢をつめると突き当たりに、清水の流れ落ちているところがありますが、その手前の、本沢の沢の水を湧水だと教え、水筒に詰めて持ち帰りましたが、あとで気が付きましたが、後の祭り。２、３日後「あれは山の名水か」と聞かれ、困ったことがあります。その後、先輩からは山行の誘いは絶えてありません。

# 君看ヨ双眼ノ色
きみ　み　　そうがん　いろ

永井　和男

毎年春になると憂鬱なことが一つある。野球の放送である。AMラジオの左から右まで第二放送とFENを除いて全て野球放送に占領されてしまうことが度々となるからだ。民放ならともかく「NHKお前もか、金返せ」と叫びたくなる。電波障害の山間僻地まであまねくサービスする精神か、それとも日本国民一億二千万火の玉、いや野球狂とでも思っているのか。

愚妻のようにどうも野球のルールが解っていないならともかく、これでも私は高校時代いっとき野球部に所属したこともあるくらいだから根っからの野球嫌いとは言わない。ただ「神宮球場カラスが三羽・・・」と静かにアナウンスならまだしも、あの絶叫はこたえる。「ウルセー、おめえ何わめいてんだ」とこっちがわめきたくなる。そこでNHK通信高校講座数学Ⅱなんかにダイヤル合わせることになる。もっとも社会、歴史、時事問題など結構悪くはない。

ではテレビはどうなのと言われるなら、毎度お馴染みの中高生対象のドタバタが多いのに辟易するのと、何よりもこちとらは「前線に送るタベ」とは言わないが、「話の泉、二十の扉、わたしは誰でしょう」なんか聞いて育ったくちであるからラジオは目をつぶっていても、頭の中で勝手にイメージする無上の楽しみがある。映像を見ないでいいのはなによりの目の保養だ。ついでにラジオ聞いて育ったと言ってもうちのラジオではない戦災で焼けだされ、口に糊するの精一杯でラジオ買う余裕がない。オンボロ長屋の壁に耳つけて隣のラジオ聞いていた。コイル巻いて鉱石ラジオ作って、次に小遣いもらう度に秋葉原に行って少しずつ部品集めて整流、検波、増幅なんて３球ラジオで音が出たのは朝鮮動乱勃発の年、中学３年の始めだった。誠文堂新光社の雑誌「初歩のラジオ」の世界だ。

閑話休題、そんなわけでテレビでも静かに語りかける番組が好きだ。以前、夜８時４５分から１５分間、３チャンネルで「テレビコラム」という番組があって、各界お歴々のご意見、ご蘊蓄の時間があった。私の愛視聴番組の一つだった。

ある日、九州大学の、ドイツ文学の、横綱審議会のあの高橋義孝先生がお出になった。お話は、幼友達と久しぶりに会った。二人の間柄は、たわいないことでもいつも矢鱈とゲタゲタ笑っているゲタ笑いの仲間でいらしたそうである。その日も相も変わらずゲタ笑いをされた。満州からシベリヤへ抑留される超満員の汽車の中から用を足す時、窓から尻を出してやる仕草に二人でゲタゲタと笑い転げたそうだ。話が終わる頃幼友達は「あの満州の荒野で家内と子供に別れたきり、今も生死はまるっきり分かりません。それっきりです。」と。その時、先生は頭をガーンと殴られたようなショックを受けられたと。

芥川龍之介のある小説の中に「これは芥川自身の作か、或いは他の人

の作か知らないが」とまえおきして、「君看よ双眼の色、語らざれば愁い無きに似たり」という詩がある。人間誰しも、普段は何もない何もなかったように振舞ってはいるが、何も言わないだけであって二つの目をじいっと見つめればその背後に苦い想い出や苦悩があるものだ、と言うお話であった。

この話には後日談がある。それから何年か経って私は文庫本で「へんくつの発想」という先生のご著書を読んだ。その中で、放映後いろいろな人から、あの詩は芥川の作でなく作者不祥で禅語の一つだ、永年の研究によると等と電話や手紙で百家争鳴であったそうだ。先生は「私にとっては本題に関係の無い、どうでもよいことなのだが」とおっしゃておられる。

芥川の小説とは「三つの窓」という短篇である。日清戦争の頃だと思うが、ある戦闘艦の海軍中尉が自分の部下を事故死や自殺で３人を失ったことからのちに海軍少将に出世した時、人から色紙を頼まれると

君　看　双　眼　色　　不　語　似　無　愁

といつも揮毫した。

蛇足であるがこの海軍中尉のモデルは当時の国際人、知識人、ロマンチストの「旅順港外恨みぞ深し」の軍神広瀬中佐ではないかと先生がおっしゃたような気がする。

話はこれでおしまいであるが、お前はなぜ山に関係のないこんな話するのかと問われるならば、これは新ハイ443 ９２’９月号で我が副支部長の長谷川美江さんの「せせらぎ」の一文を拝見した時にすぐ頭に浮かんだことだったからに他ならない。

昨今、高齢者の山登りが多くなる反面、有名大学の山岳部でも部員数名だそうだ。戦中戦後に青春時代をおくった闇市焼跡派の体中に家康の処世訓「人の一生は重荷を背負いて遠き道を行くが如し」と芋の買い出しのあの苛酷さの快感？の記憶が甦っているのだろうか。そう言えば戦中戦後にノイローゼはなかったそうだ。苛酷さに身をさらすことが心の健康につながる。下賤な言葉で言えば「バカぶっこいてると山から落ちて死んじまう」と思うからだろう。

しかし今日も一人黙々と山の中を歩く人が多い。そう言う私もよく一人歩きをしたものだが、すれちがう時の挨拶に互いに得も言われぬテレたような顔はいったい何だろうか。家族という全軍を率いて雄々しく戦った指揮官が、戦いすんで日が暮れて今は「濡れ落葉」と妻子から疎んぜられ一人自由と孤独を求めて山の中を歩く姿を見るような気がする。語らざれば愁い無きに似たりとは実に言い得て妙だ。ウルマンの詩の終節に「悲嘆の白雪が人の心の奥までも覆いつくし、皮肉の厚氷がこれを閉ざすに至れば、この時こそ全くに老いて神の憐れみを乞うる他は無くなる」と。こうならないように「一身にして二生を経る」と五十才を過ぎて、家業を捨て測量術を学び十四回も日本一周をして日本地図を完成した伊能忠敬の生涯にあやかりたいものである。

# 安全登山について

長谷川　美　江

最近は中高年の、特にそのうちでも女性のハイキング人口が多い。時たま事故の話を聞くが、ハイカーが増加していることを考え合わせれば、事故の発生する割合が増加したとは、一概には言えないかもしれない。しかし事故を起こすと、楽しかるべき山行が、一緒に行ったグループ全員に、良い想い出として残す事が出来ない。

私もこども達が成人し、山行に出かけられる条件が整って来て、月に何回か山へ行かれるようになった。山へ行く回数が増えれば、事故が増えると言うことはなく、歩き方が慣れてくれば、事故を零に近づけることが出来ると思う。しかし以前私も戸隠山で、右足菲骨々折をしてしまった。

又、目撃した事故としては、一昨年槍ヶ岳から北穂高岳へ向かう稜線で、南岳を越え大キレットを過ぎ、北穂へかかる手前で、午前10時頃のこと、52歳の女性が転落し、新聞報道に拠れば、午後３時頃ヘリコプターで運ばれた病院で、死亡を確認したと報じていた。

なぜ事故が起きるのか、分析は難しいが、自分自身の場合を考えてみると、前夜は戸隠中社の宿坊に泊って睡眠は充分であった。日程は一不動の避難小屋までであるから、無理はなかった。一つ考えられることは、私がその山行の係であったが、一不動の避難小屋の屋根に大きな穴があいている。役場に問合わせたが、近く修繕の予定であるが、現在はまだ直っていないとの返事であった。

蟻の戸渡り、剣の刃渡りを過ぎ、屏風岩を越え、眼の下に一不動の小屋が見えた。その時、焦る気持が生じ、足元の注意を怠り、登山道から灌木の生えた中へ滑り落ちた。咄嗟に手は木の根本を掴んだが、登山靴を履いた足は、木の間を捩って落ちて行った。この時右足の腓骨を折ってしまった。

同行の仲間に心配を掛け、荷物は分担して持って貰った。この場合は本人がどのような手伝いを必要としているか、話せるからまだ良いものの、もっと大きな怪我であっただったら、さぞかし、周囲の人々に迷惑をかけたと思う。

目撃した北穂の事故は、夏も終りに近付づく頃、早朝の上高地に降り立ち、槍沢を登って翌日北穂を経て、涸沢も上部へ来るとカール地形の特徴で、傾斜も急になる。空気中の酸素は薄くなる。疲れは溜まる。で、どのグループも前になり、後になりしながら、黙々と小屋を目指す。私の周囲にも言葉から察して、関西から来たらしいグループが、肩の小屋へ向かっている。私達は混雑を避け、殺生小屋泊りとしたが、肩の小屋までは、尚40分歩かなければならない。道連れになった人に訊くと、東京方面からは、シーズン中は臨時急行もあり、上手に利用すれば、混雑を避

けて、寝て来ることも出来るが、関西方面から松本へは、列車の本数が限られ、大変な思いをするそうである。そして、小屋が混んでいるとゆっくり寝られない。疲労は取れない。最初の日より２日目の方が大変である。そんな時に、少しも気の抜けないコースを通過する日程が組まれていたら、特に気を付けなければならない。

新ハイに入る前には、若い人達のグループと山へ行くこともあったが、若い男性の実力と、中年婦人のそれとの差は大きい。老若男女の混成チームの場合は、無理をしやすい。そんな時に、一瞬の気の緩みが、事故に繋がるのではないか。

山行に甘えは禁物であるが、自分の状態を、はっきり言葉に出せるということも大切だと思う。

兼好法師の言葉にある『過ちすな、心して降りよ』と、軒丈ばかりなりて……を自戒の言葉として山をくだる。

## 定年と山と新ハイの仲間達（続編）

御園培博

前回の歯朶に、標題で拙文を掲載させていただいた。当時年令は５９歳、現役として仕事、仕事の毎日であつた。支部山行に参加したくても、１泊以上の予約申し込みは７，８月を除いてほとんど不可能であった。そのようなことから、定年後の自由な山歩きを夢みていた時代であった。【退職後の人生をただ単なる「第二の人生」としてでではなく、本当の意味での自分自身の人生を迎えることができるものと思っている】としたためてある。また、【新しい人生の生き方として、山を愛し、山に魅せられた新ハイの仲間達と共に、山を登ることであると思っている。】とある。

今、振り返ってみて、こうした思いが間違っていなかったこと、さらには、思っていた以上に楽しい山歩きができたことに、あらためて人生の喜びに浸っている今日このごろであります。ちなみに、一昨年は、１年間で２４回、延３５日、昨年は、２５回、延４０日の山行ができた。これからも今まで以上に、仲間達と楽しい山歩きができることを心から願っております。最後に前回の結びの文を再掲させていただきます。

【「山」よ、「新ハイの仲間達」よ、どうか、私の新しい人生を大きな愛で迎えてくれることを心からお願いいたします。】

# 歩く日本横断に挑戦

茂木　武

ある決断

平成２年の５月、私は三頭大滝から三頭山へ登った。帰路は和田峠めざし笹尾根を歩いていた。その時ふと、これは奥秩父まで連ながる気がした。人間の意識の構造とは不思議なものと今でも思う。何の前ぶれもなしに、突然浮かび上がったのが『日本横断』であった。本誌『しだ』前号、太田繁信氏の快挙の記事を読んだ時の感銘も、意識の根底にあった。この日は和田峠から陣馬下へくだった。

平成２年夏、私は『歩く日本横断』に挑戦することになった。

１、方法としては①実績継続方式をとる。②コースは著名な頂稜を行く。③方向の正規は、東→西、南→北であるが、最終回以外はこだわらない。④バスその他で連ながっている所はすべて歩く。

２、横断ルートは、湘南海岸ー箱根ー丹沢ー奥多摩ー奥秩父ー八ケ岳ー北アルプスー日本海までとなる。

大まかな構想が固まったところで、家族にも話し賛成を得た。こうなると気持が高ぶって眠れなくなった。

実績を検証する

地図は２０万図で、横須賀、東京、甲府、長野、高山、富山の６枚準備する。古いものは記憶に頼る。若い頃の後立山連峰や八ケ岳の縦走も、タイムスリップして登場。ルートに入った山行の思い出も次々よみがえる。支部山行では三頭山～奥多摩湖。箱根の明神岳～明星岳。忘年山行での寄～新松田。笹尾根と丹沢間の空白を埋めた石老山～石砂山と、数々の山行を「日本横断」に無断利用させて頂き、当時の同行の皆さんに謝意を表したい。

さて早速、前述の地図に赤線を書き入れる。結局、箱根ー丹沢ー奥秩父まで連ながった。奥秩父西端～八ケ岳～北アルプスは、飛びとびで手入れを要す。

重症の赤線病にかかる

６月から空白埋めを開始する。週末は、せっせと夜行日帰りで、中央本線通いが続く。７月上旬までに①箱根～小田原御幸海岸②新松田～大雄山③石老山口～明王峠④牆瑞山～横尾山～飯盛山～野辺山（ヤブ歩き）⑤麦草峠～北八ツ、蓼科山⑥霧ケ峰、美ケ原～松本まで歩き、前段を終了する。

夏山シーズンの７月下旬から８月中旬までは、北アルプスに３回入る。通算８日で、松本ー大滝山ー常念岳ー槍ケ岳ー裏銀座方面ー爺ケ岳と結んだ。（以北の後立山はすでに済み）これで太平洋岸（小田原）ー白馬岳まで完了し、マージャンで言えばリーチがかかった。

日本横断を達成

８月２５日は晴天に恵まれた。朝、白馬駅からタクシー相乗り。猿倉を６時に出発する。白馬尻では雪解け水が、音を立てて流れている。むろん雪渓は歩行不能、右岸ぞいに秋道を登る。周囲はすっかり秋の気配だった。白馬岳からは快適に縦走路を北へ。三国境、雪倉岳を経て、朝日小屋に入る。１５時になった。「栂海新道は相当荒れていますよ」と小屋の人の話だったが、いまさら後へは引けない私である。

翌２６日は待望の終曲となる。晴天。先ず朝日岳に登頂。北へくだって栂海新道に入る。途中２度ほど、道を見失ったが、元に戻り地図とコンパスで行動し、ルートに乗った。白馬連峰が次第に遠ざかる。犬ケ岳に着いた。ここがほぼ中間点。栂海山荘を覗いてみる。人の気配はない。普通ならここへ泊まるのだが、先へ進む。黄蓮という水場探しで時間を浪費する。白鳥山、尻高山と過ぎ鉄塔のところで休憩する。見ると前方に日本海が広がっていた。なにか波の音さえ聞こえる。「とうとう、やってきた」。感激である。山道を駆けるようにくだる。

日没の迫った親不知の海岸は、岩礁に荒っぽい波しぶきを上げていた。　　（平成２年８月歩く）

# 「キタダケソウ」に逢えた。

北村　襄

日本第二の標高を誇る、南アルプス「北岳」にまた登ることができた。前回は五年ほど前の七月３１～８月２日にかけて、今回のメンバーと全く異なる方々と登り、目を皿のようにして「キタダケソウ」を捜したがすでに花が終わった後でついに逢う事が出来ず、ちょっと残念な思いがしたが、数々の楽しい「思い出」が残っているとても好きな山で、北アルプス山塊とはまたひと味違う山々です。

今回（平成四年）は七月の半ば梅雨明け宣言が出る前に、天気図で先をみこして梅雨明け宣言も間近に発表されるだろうと判断して「北岳」に登ってきた、最初は週末にゆく予定が、雨のために延びて日曜日の朝出発することになり、そのため参加者が減り同行三人のだけの山行となった。

途中番狂わせ等があり、登山口の広河原に着いたのが１４時近くになったため当日は三時間程登ったところにある、白根御池小屋に泊り、　翌朝頂上を目指すことに決め夕日が鳳凰三山を赤く染める頃、御池小屋にたどり着いた、旧小屋の横にロッジ風の新しい建物が出来ていてビックリ、　宿泊者は我々三人だけで部屋はどこでも好きに使って良いとのこと、シーズンに入れば、すし詰めを覚悟しなければならないのに、今年は六月に入ってから雪が降ったとのことで小屋の近くにも雪渓がみられ夕日が沈むと急に冷え込んでくる、小屋の標高が2200m なのだから当然のことだろう。

翌朝は快晴、北岳の頂上近くに月がかかっている、この分だと今日の天気はまず大丈夫だと、アップダウンのほとんどない路を大樺沢の雪渓を目指す、沢に着くと例年より雪渓が遥かに多く残っている、八本歯のコルへの急傾斜の雪渓を一歩一歩慎重に進む、気温が低いためか汗もでない右手には日本でも有数の大岩壁、北岳バットレスがおおいかぶさってくるように感じる、　ときどき腹の底に響くような音をたて岩壁より落石が発生している、今年の冬の間に雪と氷のため岩がゆるみ雪が解けるとともにそれらが落石となっているのだろうが、とにかく凄い音が近くで聞こえてくる、八本歯のコルへの木の梯子は良く手入れされていて前回来たときより格段に良くなっているので注意さえすれば心配なく登れる。

コルへ登り着いた時ふと足元に目をやると這い松の根本に鮮やかなピンク色のイワカガミの花が一輪微笑んでいるのに気付き疲れも一気に吹き飛ぶ！コルからわずか登った所からは高山植物の群落、とくにハクサンイチゲの白い花が多くそのなかに黄色や紫やピンクの花が咲き乱れている標高３０００m前後の岩の間の

わずかな斜面を彩っている天上の楽園だ 山の天気とナントかは、わからないので、とりあへず北岳山荘に行く前に頂上へ向かう、頂上までの路は岩と花が案内して呉れている感じがする。
頂上はさすが日本第二位の標高 ３１９２、4mを誇るだけあって360° の大展望！
３０００m級の山々にしばし見とれてしまう、白峰三山の「間の岳」「農鳥岳」等の、やまひだに雪が特に多く残っていたのが印象的だった。
途中まで今来た路を戻り、北岳山荘へと向かう、ここの公衆電話は恐らく日本で一番高いところだろう、山荘に入ると一番先にに日程が一日延びたことを各々家に知らせた。　ここの電話は登山口の広河原までは無線でつなげる仕組みになつているが、町中で掛けるようにすぐにつながった。
山荘の人が今朝．梅雨明け宣言がでたよと教えてくれ、やった！！　とお互いニンマリ、この山荘の定員が300人位の所、ここでも 40人位しかいない、山荘の人に聞くとまだ「キタダケソウ」が見られる所がすぐ近くにあるとのことなので場所を詳しく教えてもらい、Mさんとともにカメラだけ持って見にゆく教えられた道をゆけどもゆけども見あたらず40~50分歩き殆ど八本歯のコルにあと数百mの所の岩かげにひっそりと咲いて我々を待っていて呉れたようです、花の直径は２～３センチ位で５～８枚の純白の花弁を持ち特に葉の形状に特徴が見られた。

長い間、逢えることが夢だった幻の花「キタダケソウ」！！にやっとのことで平成四年七月二十日に逢えました、この花は花季が雪解け直後二週間位だそうで日本でもここ「北岳」頂上近辺だけでしかみられない古い時代に起源を持った花で近似種が北海道の日高山地にあるだけの貴重な花です。
アッと云う間に手持ちのフィルムが尽きてしまい山荘に戻って一本千円也の高いフィルムを買う羽目になりましたが、それでも永い間の夢が報いられ十分に満足し、幸せいっぱいの日になりました。
翌朝も快晴、昨日花を見に行かなかったＯさんにも見せてあげようとルートを「キタダケソウ」の咲いている路に変更、再度頂上へ充分に眺望を楽しみ澄んだ空気を腹一杯吸い込み、肩の小屋を経て、草すべりルートで一気に500m以上を下り、昨晩泊まった白根御池小屋で早昼食を食べ広河原へと戻ってきたが、今回のように天気の予測が当ると本当に嬉しいものですね！！よく梅雨明け三日間は晴れると云われているが！！
余談になりますが我々が帰ってきた翌日からまた雨が降りました。

# 新ハイに入会して

有山好子

私が新ハイキングの本と出合ったのは、何気なく手に取った一冊の本でした。私がお使いの途中立ち寄った有隣堂で立読み中山渓・岳人の立派な本の傍にひっそりと今まで一度も読んだことななかった新ハイキングの本がたった一冊置いてありました。まるで私を待っていたかのように偶然にも私の目に飛び込んで来ました。頁をめくって行くうちに、私の求めていた何かがあるような気がして来たので、すぐに買い求め家に帰って一気に読みました。

私は山が大好きです。山の素晴らしさを知らない友人は私をことを笑います。「山が恋人だってサ！　山が来てくれないから自分から逢いに行くんだってヨ！」とからかわれます。そんなに好きな山でも私は憶病なのか一人では出かけられません。或る時、会社で同僚だった友人と20年振りに再会し、それがきっかけで二人て山を楽しむようになって十数年、こわいもの知らずで二人で地図を見たり，山で出合った人達の話を聞きながら、あっち、こっちの山を小屋泊りしながらのんびりと歩いて来ました。その大切な友人が昨年膝を悪くして山へ登れなくなり私一人になってしまいました。丹沢・大山・高尾山と近山を一人で登って見ましたが何かが欠けていて淋しい。本当に山の好きな人は一人でも歩くと云うが、私にはその勇気が無いのか、休憩の時、食事の時、何ともわびしさを感じます。その折偶然にも新ハイの本と出合い「よし、この新ハイの門を叩いて見よう」と決心し、支部長さん宅に電話をして支部の会合に出席してみました。

先ず感じた事は、皆んな山好きの人達ばかりで若々しく元気、そして計画をきちっと立てて無駄の無い山行、話を聞いているうちに是非この会に入れていただきたくて第一番の難関の鍋割山行、皆んなベテランの人達ばかりの中に入って一生懸命歩きました。その結果無事入会を許されて支部の一員になることが出来ました。それからは機会ある毎に、北ア霞沢岳・日光黒檜山・七面山など皆さんに助けられながらの山行、もっと早くこの会を知っていたらと思いながらも、まだ間に合って良かったと思います。一冊の本の偶然の出合いから多くの方達と知り合いになれた事は本当に倖せです。これから先、何年山行が出来るかわかりませんが、皆さんのご迷惑にならないように頑張って歩いて行きたいと思います。

# 登れなかった森吉山と小又峡

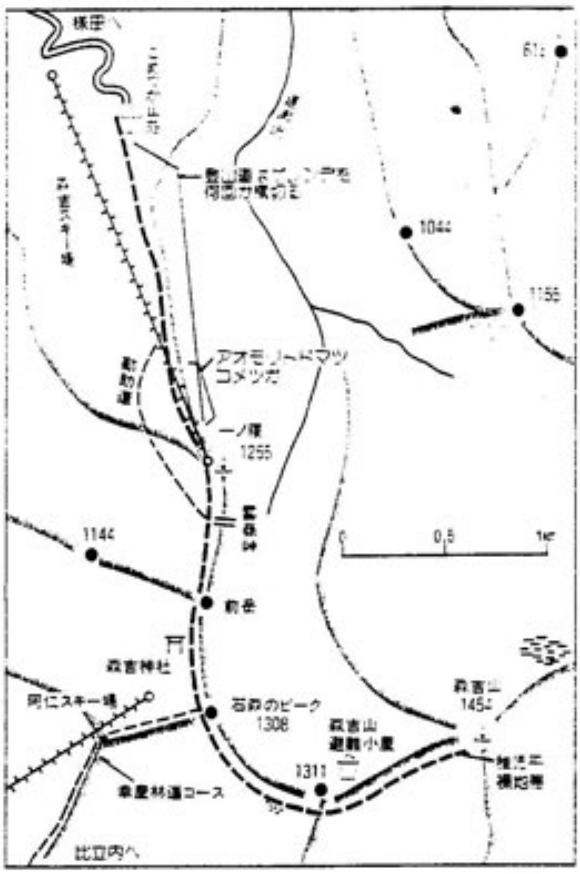
沢野正明

もう何年前であろうか、遠く秋田県まで行き登ることができず、残念に思ってる只一つの山である。登山口は数多くあるが、交通機関を利用するならば、奥羽本線鷹の巣から、秋田内陸縦貫鉄道を利用して入るしかない。

その当時、私達一行はポピュラーな登山口である、様田口から登ることに計画したのである。そのメンバーときたら、ただの雨男なら聞こえはいいが、名にしおう大雨男や台風男が混じり、６人で入った。雨男として有名な男は、吾妻連峰へ登るべく、新高湯温泉に泊っていた時、早朝、すごい雨音で目を覚ました。

この雨では弱ったなと思っていると、何と水道の水は泥が混じり飲めない。従って旅館ではご飯が炊けないときた。これでは登山は無理と温泉に飛び込んだが、源泉に水と泥が混じり、ぬるいどころか冷たい始末。ほうほうの体で帰ったほどである。これで大雨男となった。

台風男も有名で、北海道旅行の際に、すぎさったと思った台風に青森で再会し、駅でダンボールで仮泊、北海道に渡ったはいいが、ゆっくり台風に付き合わされ、散々な目に会った男である。そんな連中と行ったのだから、この山行は只では済まされなかったのである。




我々の行程としては、第１日は国民宿舎森吉山荘に泊り、翌日小又峡に行き、様田に戻り、森吉山に登るというものであった。鷹ノ巣から阿仁前田までは順調であった。ところが何と、前日に降った大雨で、道路は不通になり、バスは様田までしか行かないという。これには困ったが皆と協議の末、様田まで行けば何とかなるだろうと、バスに乗った。バスは本当に様田で折返して、帰ってしまった。

さて、これからどうしようと、鳩首を集めて相談てた結果、予定を変更し、今日こめつが山荘まで入ろうと言うことになった。

様田という所は、登山口のためか民宿があり、１軒の民宿で電話を借用し、国民宿舎に連絡して、宿泊日を替えてもらい、さて、登ろうかと歩きだした時、民家から我々がうろうろしているのを見ていた人達の中の一人が、車を利用しないかと声を掛けて来た。こめつが山荘までは、林道を歩いて約３時間の行程であり、話を聞くと国民宿舎へ行く道路も通れるという。もちろん白タクみたいなもので、金を払うことになるが、全行程走ってもらうということで、渡りに船とばかり、車中の人となった。

車ならあっけないもので、山小屋の前まで入れる。この場所には２軒建っていて、もう１軒は営林署の建物であった。早く着いたので、登山口を探したり、付近を散策して過ごした。このこめつが山荘は、当時、森吉山岳会が管理していて、無人であったが、立派な炊事場には、ガス、米、調味料、炊事用具等が完備されていて、困っている人がてたら使用可とあった。もちろん、それに相当する料金を払うのは常識である。

畳の部屋もあり、寝具も揃っている。（もちろんこの部屋は、山岳会専用のものである）ついに午後２時頃から雨になった。次第に大雨になり、台風男がこの時間帯に降り始めた雨は、明日も降り続くとぬかす。雨音は大きくなるばかりで、皆登山の望みをなくしていた。

この日、我々の他に登山客はなく、始めは遠慮していたが、誰も来ないので畳の部屋を占領し、持参した飲料で宴会が始まり、寝てしまったが、暗くなると、鼠が我が物顔にばっこし、顔の上を走りうるさいし、それも知らぬげに大イビキをかく人がいて、私はシュラフを持って板の間に移り、ようやくウトウトすることが出来たのであった。

翌日目を覚ますと、やはり大雨の音がしきりとする。気持小さくなっ様な気もしないではないが、皆は戦意喪失。私だけが登ろうと主張するが、口惜しいが皆の意見に負けて、登山は取りやめとなった。それでは下ることになるのだが、、それもいやで迎えの車を待つという、グータラな連中だと外に出て見ると、丁度、営林署の車が来ていて、下へ行くところに出会い、予定より早く車を回してくれるよう、伝言を頼んだところ、心良く引き受けてくれて、待つことしばし、車が登って来て様田へ降りて見ると、何と山は晴れているではないか。誠に残念無念の心境で台風男を恨んだが、もう仕方がないので、車で国民宿舎森吉山荘に運んでもらった。

ここ湯の岱は、国民宿舎と一軒宿の杣温泉があり、まさに静かな秘境である。今日は雨が上がって晴となり、胸中は山へ登っていたろうになあーであった。

当時、大平湖へ行くには、非常に不便であった。バスは湯の岱止まりで、小又峡へ行く船の出る大平湖レストハウスに行くのに、マイカーか徒歩しか手段はなかっ

た。私達は幸い例の白タクは手配してあるし、明日は小又峡へ行く旨、国民宿舎に告げると幸運なことに、明日は営林署の視察があるので、定期船より早く臨時の船が出るというので、これに同乗させてもらうことにしたのが、幸運をもたらしたのである。大平湖まで歩いていたら、何ｋｍあるだろう。車でも20分程だから２時間はかかる筈だ、ひょんなことで、車の手配をしたのも、幸運だったのである。

大平湖は人造湖で、その対岸に秘境中の秘境、子又峡がある。船を小又峡入口で降り歩き始めると、いよいよ奇景が始まる。最後の三階の滝まで絶景が続く、いつまでもそこに居たいのを押さえながら、帰路、船が出るのを待つ頃、そして定期船が到着した時、もの凄い大雨となった。気の毒なのは定期船の客で、船長はこの雨では危険なので、小又峡へ行くのは止めるし、定期船もこれからは何時出るか分からないと言う。とどのつまり、定期船の客は入口へ着いたとたん、引返すはめとなった。その後、雨はやまなかった。船は欠航するし、我々は幸運中の幸運を拾ったのであった。

もう一泊予備日を国民宿舎で過ごしたが、登れなかった森吉山の姿をパンフレットで見るにつけ、何とか又行きたい山なのである。

---

## ９２　夏

平沢　隆雄

車は狭い山道をどんどんと高度をかせぐ。はるか下には遠山川のせせらぎがにぶく反射する。こんな山の上にまで　段々畑がずっと整然とつづく　これだけの傾斜地での農作業は機械も使えず大変な事だろう。お年寄りが　4,5 名歩いているので徐行しながらカーブを曲がると公民館があり　会合でもあるのだろう10名位が広場で立ち話をしている。車の音に一斉にこちらを見る　昼過ぎに　こんな所まで車が入る事はあまりないのだろう。カーブを3,4 回曲がってから車を停める。良く手入れのされた畑　道端にはびっしりと花が咲いていて気持ちが良い。遠山川の上流を見れば昨日登山した聖岳は今日は雲の中　上河内から茶臼，三日間姿を見せなかった　イザルケ岳，光岳，が見える加加森山，池口岳，さらに熊伏山，と続く。天気予報を信じて今朝の雨で予定を早めて下山したのが残念だ。　光岳登山の時は時間がなく行けなかったシラビソ高原に期待を込めて　下栗の集落を後にする。

92-7-29 ～8-1

素晴らしい知己を得た喜び　　山根基照

そもそもの始まりは、近所の飲み屋でﾋﾞｽﾀｰﾘを読みながら一人で飲んでいたところへ何処かのお客が新ハイの本を見せてくれてからです。

ちょっと見にはこじんまりとした同人誌のようで、ぱらぱらとめくっているうちに、内容と歴史にただならないものを感じてそれを借りて帰り一気に読みました。今まで一人で車で行っては、勝手気ままな独善山行を１０年以上も続けていた私は何か揺り起こされたような気持ちで本の購読申込みをしたのは去年の８月でした。

まだその時は横浜支部がある事さえ知らず、（何故か支部ニュースの最後に遠慮深く乗っていたものですから）１０月になって紅葉が丘の青少年センターで例会が開かれているのを知り、１１月に入って恐る恐る来てみたところ日にちを１日まちがえていて、事務所の人に笑われてしまい、1ヵ月我慢をして１２月に来てみたら時間が遅くて、今度は「早目に終って忘年会に行かれました」と云うことでもう恥ずかしいから止めようと思ったものでした。

でも年末から年始にかけ一人で何処かへ行こうと思っても、山へ行く人達のグループがあることを思うにつけ、また「新ハイ」を読むにつけ、新たにまだ見ぬ人々に会ってみたい衝動に駆られ、その年はむざむざと日を過ごしてしまい、２月に入ってやっと例会に顔を出して、皆さんに会いました。でも親切に説明をしていただきながら、皆さんのお話しを聞き、頂いた名簿を見てその歴史の奥深さに本当に驚きました。

これはとんでもない、私なんか仲間に入れて貰えるなどおこがましいにも程があると、意気込んできたのが恥ずかしく、じっと座っているのさえ耐

えられない気持ちでした。

これは仲間に入れて貰えるまで何年も掛け、みんなの気持ちが解ってからでも遅くはないと心に決めたものでした。

３５年と云う歴史を支えて来られた皆さんの努力が何処から来ているものなのか、思うにつけ「ハイキング」という言葉を何となく軽んじていた自分に気がつきました。

駄目でも仕様がないと諦めていた私の所へ３月に入って熊谷支部長さんから葉書で「日帰り山行」を２回程やってもらってから入会して頂く決まりがあり、ただこの冬は日帰り山行の予定はなく、春まで我慢をして下さい、例会には遠慮なく出ていただきたい。」という心のこもったお便りを頂き、１年でも２年でも待って仲間にいれてもらおうと決心しました。

しかし早くも１０月には入会を許され、すでに５回の山行に行き、皆さんの強靭な脚力と和の楽しさを目のあたりに見て、このすばらしい人達と知り合えた喜びは何物にも変えがたいものと感じています。

一度に５０人の友人(勝手に呼ぶことが許されるなら)と知り合えるなど夢の様です。

今後も皆さんのお荷物とならないよう何とか付いて行きたいと考えていますので宜しくお願いいたします。

# 山・山 ふたつの思い出

石原弘之

早いもので、横浜支部に入ってから10年が過ぎた。『歯朶』の投稿も３回目だ。支部の皆さんに支えられて、登った山も数え切れない。そして、何回登っても飽きのこない山。好きな山ができた。それらの山の一つ一つにも、それぞれの思い出がある。

☆ 十 二 岳

支部に入って最初の山行が、十二岳であった。参加者５名。当時は５～６名の参加が普通で、10名以上ということは殆どなかった。ゴロ合わせで期日を選んだわけではないのだろうが、12月12日の十二岳である。頂上で昼食をとの事となり、登頂してみると山頂で６名の方が食事中。そこに我々も加わって、11名、あと１名で12名と話していると、単独行の方がこられた。しかも新ハイの会員で、顔見知り。早速仲間に入り、総勢12名。１２月１２日。十二岳の頂上で１２名、偶然とは面白いものである。下山の途中で夕闇の中で見た、墨絵のような富士山も忘れられない一日であった。

☆ 白 毛 門

上野を夜行で出発し、土合から白毛門・笠ヶ岳を経て下山するコース。白毛門の急登も難なく登り、谷川岳の勇姿を心ゆくまで眺め、下山の途についた。ところが、途中で道が消えてしまっている。台風か何かで、荒れてしまったらしい。時間的に引返すわけにゆかず、沢に沿って下山することとなった。積雪が多かったためか、沢は雪渓になって伸びている。係の指導よろしく、苦労しながらも無事下山。帰りの電車は、前日の夜行の寝不足と疲れのためか、殆どの人が眠りこんでしまった。その折りに、どんな会話があったのか知らないが、一組のカップルが誕生した。嬉しいことである。

数年後、同じく白毛門から朝日岳を経て、清水部落までの山行があり、これも途中で雨に降られ、下山道は雪渓に覆われて、前回と同じく苦心の下山であった。この時の民宿のご主人の、暖かい心遣いが忘れられない。途中までマイクロバスで、迎えに来てくれ、宿舎では、お酒まで振る舞ってくれた。本当にくつろげた。そして又、一組のカップルが生れた。白毛門は縁結びの神様が、いらっしゃるのではないかと思った。二度あることは三度ある。次ぎの白毛門山行でも、新しいロマンスがと期待している。

１０年一昔というが、年を重ねると、無理はできないと思うようになった。ゆっくり山行、そしてグルメと温泉があれば等と、虫のよいことを考えている。これからも支部の皆さんに、ご迷惑をかけないよう、山登りを続けたいとおもっている。よろしく、お願い致します。

# フイールド サイン

芹　沢　隆　仙

まだ山小屋が、予約制になっていなかった年の９月末の平日、尾瀬に入った。長蔵小屋の自炊棟に泊ろうとしたら、自炊の客が居らず、閉鎖しているので、本館に泊ってくれと言われた。その本館も10名程度しか泊らず、６畳１部屋を借り切った。石鹸を使用してはいけない風呂にも、ゆったり入ることができた。夜ビジターセンターでボランティアによる、尾瀬のスライドがあった。集まったのは８人、尾瀬の季節毎の花々を紹介してくれ、季節の最後の花が、大江川湿原にひっそりと咲いていたエゾリンドウだということも知った。

翌朝は曇りだった。燧岳や至仏山は登っているが、尾瀬沼を一周したことがなかったので、のんびり歩いてみようと思った。三平下を通って、大清水平分岐を大清水平に行ってみた。以前皿伏山から富士見平へ抜けた時、大清水平からの燧の姿と黄葉が印象に残っていたのだ。しかし平に着くや、たちまち霧が立ちこめ、黄葉も双耳峰も見ることができず、唯もう枯れたニッコウキスゲの茎が、風に震え、盛夏の華やかさを、思い出させるだけだった。しかしここは、人気もない静かな尾瀬を味わえる、好きな場所であった。

周遊コースニ戻り、沼尻から白砂峠を通り、見晴し十字路に向かう頃、雨がポツリと落ちてきた。樹林の中の木道の上に、何かが落ちていた。よく見ると、それは獣の糞だった。食べた木の実が、原形のまま残っているような。その動物は、白昼姿を見せないけれど、森の中に確実に、存在していることを示していた。

― 動物たちの落し物、足跡、糞、食痕、山道の周辺、日中姿を見せない動物達の生活痕 ― それがフィールドサインというものと、説明板に書いてあった。尾瀬にいる、いわゆる獣は、ツキノワグマ、カモシカ、ウサギ、リス、キツネ、ムササビなど30種類が記録されているが、その殆どが夜行性だという。

私はまだ、本当の夜の尾瀬を歩いたことはない。夜明前、星を見ながら、三平峠を越えたり、至仏に登ったことはあるが、夜の尾瀬は恐らく、野生を取り戻し、日昼姿を見せない動物達が、原を、森を、沼を、川を走り、飛び交い、そして泳ぎま

くる本当の世界なのだろう。人間は彼らの宇宙に侵入してはいけないのだ。今、山の獣の殆どは、年々少なくなってきているという。代わりに本来、生息していないドブネズミが、増えてきているという。

植物にしても、本来種ではない移入植物が、50種近く発見されているという。尾瀬の植物は、貧栄養の環境の中で生きているのだが、汚水やゴミで富栄養化し、繁殖力の強い移入植物が、人間と共に入ってきたのだ。

尾瀬は自然保護運動発祥の地であり、歴史そのものである。登山者も山小屋さえも、自然を汚染していることを自覚し、そこから自然との共存が始まるのではないか。

見晴し十字路で、本降りになった雨の中を、原の方はあきらめて、長蔵小屋へ向かった。尾瀬の山小屋が予約制になったのは、その翌年からであった。　－完－

# 私の失敗談

山田　和子

おっちょこちょいで、思いこみの激しい私には、いろいろな失敗があります。あれは、昭和６２年５月の支部山行で、南大菩薩のハマイバ丸～大谷ガ丸に参加した時の事でした。

長丁場だからと、私は大小２本の水筒を用意して行きました。リーダーに聞いたら、水は途中で得られるとのことで、カラで出発しました。

さて、沢沿いに登っていて、リーダーが「１本いれます！」というので、待ってましたとばかり水筒を出して水を詰めました。素直な私（自他ともに認めるところですネ）は、リーダーの言うとおり１本だけにしておきました。

ところが、少し進むと沢は細くなり、その内に涸沢になってしまいました。気をもみながらも、おいしい伏流水でもあるのかな？　と、今か今かと待っていた私でしたが、リーダーはどんどん行ってしまいます。

「もう１本いれます」の声はとうとう聞かれませんでした。よく考えてみれば、おかしな話です。日帰り山行に２本の水筒を持ってくる人などいません。よしんば、私が２本持参したことをリーダーにあらかじめ話していたとしても、なぜ２回に分けて水を入れるのか疑問に思わなかったのでしょうか？

漠然とながら、何か勘違いをしでかしたなと思いましたが、悪いことは重なるものです。５人の参加者の中にＯさんがいたのです。あのすすめ上手という噂の方です。

その日は天気が良すぎて、バテ気味、滝子山の下でお昼になってしまいました。Ｉさんのわけてくれたビールのおいしかったこと！　でもまだ登りがあるので１杯だけにしておきたかったのに、　Ｏさんから、コハク色の水をすすめられている内に、一同すっかり盛り上がってしまいました。その結果後半の行程で、しきりとノドの渇きを訴える人が続出しました。

私が残り少ない水を飲んでいたら、リーダーの太田（繁）さんが、たまりかねたように所望されるのです。あの我慢強いベテランの方がです。その時知ったのですが、彼はその日、水を忘れてきていたのです。駅で買ったウーロン茶１本では持ちこたえられなかったのです。可哀そうな太田さん。タップリ飲ませてあげたかった、私も心ゆくまで飲みたかったと、今も思い出すのです。

教訓　『聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥』

# 安全登山のために

山　本　一　夫

都岳連冬山講習会に於ける顧問弁護士武田峯生氏の講演骨子より。

## 1．リーダーの選定過程

グループ登山の場合，曲がりなりにもリーダーを決めているが，このリーダーの決め方は，殆ど次の様に実に危ない内容になつている。

（1）よく山に登っている。

遭難事故が起きると「リーダーは○○年の登山歴がある山のベテラン」などと報じられているが，これはとんでもない事である。何年やっていようが単なるハイキング程度だったら「山のベテラン」などと評価を与えるのは間違っている。こんなのは，たった一年であっても厳しい山行をした者には適わない。また，他のスポーツで鍛えた者にも劣る場合がある。従って，よく山に登っている，などと言うだけでリーダーの資格を与える事は極めて危険である。もっと始末が悪いのは「昔やった」と言う輩だ。こう言うのは「口は一流，実力四流」でとやかく言ってリーダーになったり，計画の過程や山行中に出しゃばった口を出す。

（2）その山域に行ったことがある。

こんなのも当てにならない。「誰々さんはその山に行った事があるので，リーダーになって頂きます」などと言う理由でリーダーが決まってしまうことがある。
仮にある山の精通者と言うだけの理由でリーダーに推されたら即断るべきである。

（3）年齢が上である。

統制も規律もない山登りであるだけに，何となく年長者がリーダーもどきになってしまう。特にハイキングクラブ等で年長者が意見を言ったりすると，皆それに従ってしまう。年長者も計画段階では希望を言っても，山行中は口を出すべきでない。特に高齢者や中途半端な経験者は自分の考えを押し通そうとする。若年者がリーダーに成った時にはリーダーが二人いる様な形になり，統制もバラバラになる。これでは緊急時に適切な対応が出来なくなる。登山は生死にかかる場合があるので十分留意すべきである。

## 2．リーダーとしての自覚の欠如

どんな小さなグループのリーダーにも法的責任があるが実際にはリーダーに自覚が欠如しているのではないか。従ってリーダーを選ぶ時は慎重にし，また，むやみにリーダーにならない事である。

## 3．リーダーを決める時の留意点

（1）山行歴は関係がない。

勿論，山行歴は一応の目安になる。但し漫然と○○年も山を登っている「ベテラン」と称するのは最も危険である。遭難事故があると報道機関がよく使う論法である。

問題は，どのような山を，どんな季節に，どのような方法で登ったかである。例えば夏の富士山を１０回登るのと冬の富士山を１回登るのとは比べものにならない。特に留意しなければならないのは，岩場でトップで登りきれない者は，絶対にリーダーになる資格はない。

（２）できればその山域に精通している。

その山をよく知っている事にこした事はないが，山の状況は季節その他の条件で刻々と変化するので，注意を要する。無雪期に登った事があるなどは，積雪期には参考にすべきではない。それでは，リーダーになろうとする者は必ず下見をしなければならないのか，そんな事を言い出すとしたら，その者はそもそもリーダーになる能力が欠如している。そんな自信がなければリーダーにならない事だ。またリーダーにさせるべきでない。例えば沢登りの時，ルート図などはアンチョコであり，どうせ人間が作ったものである。滝の直登などは自らその場でルートを判断すべきである。

（３）沈着に行動ができ，速く歩ける人。

沈着な行動については目新しいことではない。リーダーの資質としては速く歩ける事が必要であり，緊急時に集団の先頭を切って歩く事が出来る者がリーダーになるべきである。８９年１０月の立山遭難事故は，歩くのが実に遅いからあの様な致命的な事故になった一例である。若しリーダーにつっ走る能力があったら近くの小屋に救助を求める事が充分出来た筈である。この事故には様々な意見があったが，どれも不正確な論評としか思えず，異論もあろうが，リーダーに速く歩く能力がなかった事が遭難の原因の一つだと言える。「スピード即安全」と言う事を肝に銘ずるべきである。

４．リーダー権の放棄

リーダーを決める場合，前述のように実に不合理な決め方をするので，リーダーも一寸厳しくなると全くその権能を失ってしまう。結果的にリーダー不在と言うことになってしまう。立山の遭難事故を例にとってみると，このパーティーには緊急時になってからはリーダーはその権能を失ったか，またはリーダー権を放棄してしまい，次に引継ぐべきリーダーが誰だかはっきりしなくなってしまい「結果的にはリーダーが存在しない状態に陥ってしまった」と言ってもいいのではなかろうか。

５．登山の目的

ここで問題となるのは，どの様な登山をするかである。頂上をアタックすること自体を目的にするのか，写真を撮ったり，植物を観察したり，楽しくお弁当を食べたりが目的か，等いろいろある。日本の山は頂上に山小屋があったり，緑深い山道や稜線歩きが楽しめるので，登山の目的は多種多様である。従って目的を分類するのは困難であるが，次に大別する。

（１）頂上アタックを目的とする登山。

登山は登るという事であるから必然的に頂上に登るのが目的となるが，ここでは頂

上に立つ事を目的にするケースである。この様な登山は頂上を出来るだけ速く極め，出来るだけ速く安全地帯に下山する事である。従ってトータルの時間が短ければ短い程安全である。即ち「スピード即安全」と言うことになる。このスピードが欠けると遭難する可能性が高い。端から見たらただガツガツ登るだけと思えるだろうが，目的が違うのだからこんなことは気にする必要はない。この様な登山のリーダーは厳格に決める必要がある。

（２）ピクニックに類似した登り方。

日本の山は緑も多く味わい深い低山が多いので，ゆっくりと写真を撮ったり，お弁当を食べたりする登り方もある。ヨーロッパではこの様な山登りは登山とは言わないハイキングの部類だ。最もハイキングと登山とをどう区別すべきかは難しい問題だがアルピニストの領域にハイキング気分，又はアルピニストとしての力量（技術と体力）の全くない者が入込むと，遭難事故につながる可能性もある。天候の急変によってはハイキングの領域が一転して厳しい条件になることがあり，このような自然の変化のある場所は好天候でもハイキング気分で入山すべきでない。

特に中高年は安易な気持ちでアルピニストの世界に踏込んではならない。

６．現場での判断

天候が悪化したら引返す勇気を持つこと，などと言われている。しかし，これは一面的なとらえ方である。引返すより前進する方が良い場合もある。要は安全地帯までのトータルな時間なのであって，前進して速く安全な小屋に避難することが出来る場合もある。つまり，安全地帯までいかにスピードを出して歩けるかである。

「勇気ある撤退」などと言われているが，あれは敗北の言訳に過ぎない。いかなる条件でも目的地又は安全地帯に到達できるという前提で計画を立てるべきなのであり，引返すことも前進することも，安全地帯に到達することを唯一の条件にして決すべきことである。

## 山の想い出　２題

祖父川精治

お盆休みを利用した、飯豊山登山者で満員のバスは、磐越西線山都駅から一の木へ向かう。

更に、川入行の小型トラックの荷台へ、乗り移る。真夏の、暑い日差しを浴びて大白布沢を渡り、いよいよ長坂と呼ぶ延々として続く急登にかかる。飯豊連峰縦走する装備で、会津の名峰博士山を越えてきた疲れが、足腰にきてきつい。美しいブナ林を眺める余裕もなく、堀割りのようにえぐれた、狭くて歩き憎い登山道をただひたすら登る。

地蔵小屋を過ぎ、やや下ると視界は一変、危うい岩尾根となり、汚れた残雪の周囲には高山植物が咲いている。クサリ場もあり、福島、山形、新潟各県の区境をなす三国山の頂上には、ポッンと小屋が望める。当時の飯豊山で、頑丈な山小屋を見たのは、この小屋だけであった。あとは、全て掛け小屋で、シーズン終了後は、解体してしまうといわれる。　種蒔山を右に巻くと、ゆるやかに起伏した草原が美しく、遅咲きのニッコウキスゲの群落があちこちに見られた。

深い実川を隔てて、暗いシルエットの大日岳が遠く望まれる。この辺りは、テント場のようだが、私達はテントの用意がないので、切合小屋へ泊まることにする。月山で見た笹小屋と同じで、宿泊は１０人程度。夜露が凌げ食事できれば幸せと、１枚の毛布に２人でくるまり、外側に板戸を立てかける。

（１泊３食付３００円とメモにある）

５時に出発。草履塚の八合目に、珍しいオンバ様の石像がある。主稜には水場が多く、テント持参でまた来たいねと話会う。広大な頂上には、石垣に囲まれて飯豊山神社があり、宿泊もできるらしい。神官がいたので、記念にお札を買ったら、牛の絵が描かれてあった。牛と飯豊山が、どのような縁りがあるのか、つい聞きもらしてしまった。

１等三角点標石の周辺は、足の踏み場もない程のヒナウスユキソウの大群落。東北の大朝日岳でも、同じ風景ですばらしかった記憶がある。

縦走して長駆、山形県側の長者原へ下る。途中から雷雨にあい、あっという間もなく小沢は増水。急な流れの渡渉には、ほんとに参った。全身ズブヌレの後、夕暮れ近くになって、恐ろしいメジロアブに襲われる。私達５人に、平均２～３０匹は群がってきて、シャツやズボンの上から噛みつく。手拭いを振り、逃げ回って虚しい抵抗をするが、誰か助けてと悲鳴あげ、ほんとに泣きたい思いだった。

田子倉ダムから、大鳥ダム、奥只見ダム工事現場を歩いた時、同じようにメジロア

ブに襲われて、怖い思いをしたことがある。山の人達は、だからお盆の頃は山へ行かないと、笑いながら教えてくれた。

泡の湯温泉へ、やっと辿り着いたのは２１時頃、１６時間も歩いたことになる。宿の　主人は、いやな顔も見せないで遅い食事の支度をしてくれる。それを残らず食べ終わると、２山も越えてきた疲労がどっと重なって、腹をさすりながら泥のようになって寝てしまった。　　（昭和３６年８月の紀行）

本格的に山を登り始めた２年目の夏、昭和２３年６月に私達のグループでは、尾瀬山行を計画した。

東武バスと往復の貸切バス、山小屋の予約と、係は交渉で大変だったらしい。写真と山の本でしか知らなかった尾瀬、夢にまで見た尾瀬へ、このように早くこの足で踏めるとは、思いもよらなかった。昭和２３年といえば、戦後の混乱期で社会情勢も悪く、皆その日暮らしで山登りの余裕もなく、この機会を逃したら尾瀬へは永久に行けないと思われた。

現在では、最も代表的なコースである三平峠－燧ケ岳－三条の滝－尾瀬ケ原－至仏岳－富士見峠と２泊３日の行程、貸切バス１台分の３０名。３日間歩いて私達のパーティ以外、誰とも出会うことはなかった。

食料不足で生きるのに精一杯、世の中がこれからどうなるのか、誰も分からない時代であった。切符の購入も面倒、旅館や山小屋へ泊まる時や、食堂で食事するにも、外食券か米持参が絶対の原則。私達も、２泊６食分として、各自米１升持参するのが、参加の第一条件。弥四郎小屋へ２泊したが、マスで持参した米を計り、ひと粒も無駄にすまいとそっとザルに入れたものである。

上野発の、上越線の汽車の中は、食料品等買い出しの人達で超満員。ヤミ米を運ぶ人をカツギ屋、燃料の木炭を運ぶ人をカラスといった。沼田駅から、貸切用の東武バスはガソリン不足で、車体の後部に釜を搭載した木炭バス。定期バスは、沼田－戸倉間１日２往復。木炭バスは力不足で、急坂では全員下車。休憩する度に、水の補給、燃焼をよくするため送風機のハンドルを回していた。

大清水まで、３時間３０分。道も、沼田市内が舗装されていただけで、あとは土ほこりの悪路、乗車しているだけでもほんとにくたびれた。昭和２２年６月、尾瀬へ行ったＩさんは、沼田から徒歩で往復したという。

三平峠から、残雪の燧ケ岳を眺めたとき、世にもこんな神秘的で美しい山があったのかと感心した。太平洋戦争の、爪跡など忘れてしまうような、平和な尾瀬のたたずまいがそこにあった。尾瀬沼の辺に下り、遅い昼食となる。群がるハエ、ブヨの物凄

さ、登山道のヌカルミで全員ドロンコ。こんなことは、ガイドにもないことで、いささか参った。

燧ケ岳へ、雪渓状のナデツクボを登降、夕暮れの弥四郎小屋へ着く。いろりの周りには、岩魚が干してあった。夕食毎に、岩魚が皿に２匹並んでいたので、２泊で計４匹食べたことなる。やわらかい煮付けの味、美味さなんといったらいいのだろうか。その後、尾瀬へ行く毎に食事の内容が変わっていった。岩魚が１匹となり、次に海の魚になり、岩魚がまぼろしの魚となってしまった。尾瀬といえば岩魚、岩魚といえば尾瀬を思い出す、私達の岩魚はどこへ消えて行ったのだろう。

カッコーの声で目を覚ます、三条の滝を見てから尾瀬ケ原を散策。原には、道はなく踏み跡も不明。池塘、小川を避けて適当にどこでも自由にあるけた。東電小屋、温泉小屋は健在、山の鼻小屋は倒壊して使用不能。至仏山は、登路荒廃して時間も不足、登頂はあきらめる。Ｔさんという復員帰りの５０歳位の人は、喜びの余りの着の身着のまま、ザンブと池塘へ飛び込み尾瀬山行の話題を独占する。

３日目、富士見峠の小屋へ立ち寄り、あやめ平を見て下る。あやめ平は天上の楽園といえる広大な湿原で、その後、大勢の人達に踏み荒らされてしまった。この時の山行記録の他、費用のメモが書き残っているのが面白い。それだけに、費用の捻出が大変だったのである。

| | |
|---|---|
| １，上野－沼田国鉄往復 | １００円 |
| ２，沼田－戸倉貸切バス往復 | ４２０円 |
| ３，弥四郎小屋２泊（米別） | ４００円 |
| ４，沼田駅前の銭湯代 | ３円５０銭 |
| 計 | ９２３円５０銭 |

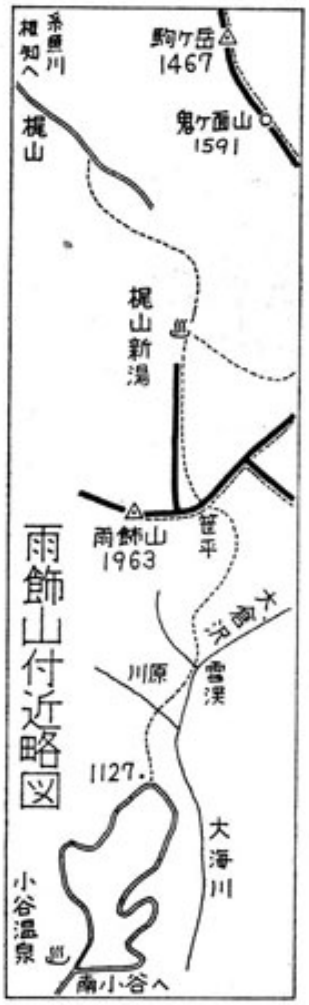
その頃、自家用風呂のある家は珍しく、山の帰りは専ら、駅前の銭湯を利用したものだ。風呂代が、比較の目安となり、尾瀬山行の費用の高価なことか。履物は、全員地下足袋を着用していたと思う。（昭和２３年６月の紀行）

# —虹を見た—

鎌田善子

雨飾山に登った。麓はワイドスクリーンの、筆舌に尽くせぬ程にすばらしい紅葉だった。10月の始、雨飾山荘に宿を申込んだが、紅葉の時季で満杯と断られた。諦めきれずに近郷の民宿に、手当り次第に電話をしてみた。役場で聞いた最後の宿、小谷村の大なぎ荘に「布団部屋でも、無ければ寝袋でもいいから」と頼みこんだらＯＫが出た。せっかく登ろうと決めたのだから、どうしてもこの機会に決行し度い。その一念だった。

土曜日の朝早く横浜を発ち、中央道の紅葉をゆっくり、のんびり楽しみながら小谷村に入る。小雨が降っていた、天気予報も雨と報じていた。それでも近くまででも良いから行こう、下見をする丈でもよいから……　と出掛けていった。一晩中よく降った。朝もふっていた。未練がましく、登山口まで雨の中を出掛けて行った。その先の鎌池まで行き、ブナ林亭に車を置いて、池の方を写真を撮りながら、散策をし時間を過ごし、方向転換。今日は鬼無里を通り、戸隠高原を経て遊びながら山岳ドライブをし様、と話合い、次回登山する時には、此処に車を留めて登ろうと、登山口まで引き返して来た。雨が止み、陽がさしてきた。登山道を挟んで山一杯に大きな溜息の出る程、大きくて美しい虹が出た。



雨飾山付近略図

虹の足元から足元まで、はっきり見える綺麗な虹が。喚声をあげ、写真を撮り、ワイドスクリーンの紅葉を眺めているうちに、「登ろう、大丈夫の様だから登ろう」と、リーダーの断が下った。虹を見て時間を過ごしている間の出来事だった。

余分の物を車に残し、身支度を整えて、鎌池林道登山口より出発。大海川に沿ってなだらかな道を広河原まで、ブナ林の急坂を登り、トラバース気味に下り、飛び石づたいに荒菅沢を渡る。ふり仰げば、双耳の雨飾山がすごい。対岸を登る。しばらく急坂を喘ぎあえぎ登ると、難所のぞきに出る。黒姫山から見た、すごいガレ場だ。前方に雨飾の山頂が見える。小雨が降り始めて来た。一面の笹原を、黙々と憧れの山頂に向かう。西峰の石仏の前で、シャッターを切り、東方のケルンと、三角点標石の前で、やはり記念のシャッターを切る。

雪まじりの氷雨が降ってきた。山の天候は、アッという間に豹変する。急いで下山。さすが雨飾山、雪まで降らせてくれた。10月の末で日本

海側の山なので、当然かもしれないが、山頂の雪は、正に天の演出としか思えない、厳しいものがあった。視界は殆どなしだが、晴れていれば、あの辺りが鬼面山、日本海、あの辺りが黒姫山、火打、妙高と、勝手に想像をめぐらし、何時の日か天気の良い日に、又きっとゆっくり登ろうと思った。

とうとう登った。久しく恋していた、正に久恋の山に。この山に登る計画が話し合はれたのは、10月の始め黒姫山に登った時である。黒姫山頂の少し手前の、天狗の麦飯の小ピークで、日本海をバックに、写真を撮っている時、妙高、火打の奥に三角に見える山、あれが雨飾山と同定した。地図の上や、山の本の中で眺めていた山で、アプローチが長く、入りにくい山だと聞いていたが、対面して心が弾まない訳がない。来年は必ず登りましょうと、話し合ったのだが、それがこんなに早く実現しようとは、思っていなかった。山は面白いもので、登り始めると、何故か次ぎから次ぎへと計画される。しかも、山頂で決まるものが多い。実現されない計画もあるが。

昔、白根三山を縦走したことがある。その前、南アルプスの前衛の山々、櫛形山、帯那山、千丈、鳳凰、甲斐駒等、どの山に登っても、必ず山頂から白根三山が展望できた。その度にどんなに憧れたことであろう、一つの山頂を極めると、次々と展開して行くのが人情であろう。ともあれ、雨飾山に登った。今年は７月の始め、学生時代の友人と鳥海山にのぼった。７月の中旬千丈ヶ岳に、８月始め燕岳に登り、９月は朝日連峰を、寝袋と米や、野菜等背負って歩いてきた。そして10月、戸隠から黒姫山に登り、その頂上で雨飾山下見の話が出た。２週間後に決行された。下見だから、雨が降っても決行、登山口まででも行って見様と出掛けて行った。夢の様な出来事だった。正に出来事だった様な一時。小谷(おたり)温泉の紅葉のすばらしかったこと、雨飾山の雪の山頂の幻想的なこと、チャンスをつくって下さったリーダー、同行の仲間、健康と時間に限りない感謝をして、新たな夢を結びたい。

（平成４年10月24～25日歩く）

# 逝く秋に

佐野淳一郎

とうとう富士山に雪がきた。最初にきたのが十月一日。それが消えて間もなく十月末には中腹まで白くなった。

富士山の西側にある朝霧高原を更に奥深くはいった小高い丘に立って、地平線の彼方を望むと駿河湾が輝いている。

富士を見上げると、大沢の切りたった壁が眼前にせまる。あの辺が中道、銀色に反射しているのが測候所のドーム。自分の庭のように知りつくした富士。

一つひとつに胸の痛くなるような視線をそそぎながら、私は若い頃の山へのあこがれと気力とを思い出していた。

高校生のときである。われわれ山岳部パーティ十一名は腰まで雪につかりながら、トップを十メートルで次々と交代した苦しいラッセルも昨日で終わり、今日はキュッとしまった岩稜の雪にアイゼンをきかせながら山頂をめざしていた。

そのラッセルの跡を追いついてきた男がいた。彼の挨拶から地元の高校三年生で冬の富士は二度目、一人であることがわかった。

「一人とはいい度胸だな」「ラッセルをもうけたな」こういう部員の目が彼にそそがれた。

いい天気だ。ツゥーンと抜けるような青空の下でそれぞれが思いおもいに休んでいた。吐く息が澄んだ大気の中にスッと消えて行く。キラキラ輝く駿河湾の左に相模湾、東京湾と続く。

彼は立ち上がって上に向かって歩き出した。そのときだった。アイゼンを引っかけて転倒し、そのまま滑った。

「滑落だ」誰かが叫んだ。その言葉が消えるか消えないうちに、彼は視界から消えた。

予期せぬことが、いま目の前で起った。とにかく捜さなくてはならないのだ。喉がからからになって、身支度する手が小刻みに震えている。

「ガタガタするな」「しっかり踏み込め」自分に言い聞かせるように何度も怒鳴りながら、左手のザイルの張り具合いをみて、凍りついた雪にアイゼンがくい込むのを確かめ、一歩一歩踏み降ろす。これを何度も繰返して、ようやく六合目近くの柔らかな雪まできたときは、極度の緊張から解放され

て 全 員 がザックごと雪の上に倒れ込んだまま、しばらく動かなかった。

また雪の中でラッセルが始まった。

六合目まで降りたときだった。「いたぞ」と大きな声がひびいた。

二三百メートル向うの壁の下に黒い塊があった。

「準備時間を入れて２時間。もたもたしていると陽が暮れるぞ」リーダーの声がひびく。二人でペアを組み、救出の準備にかかった。小屋への道づくり、荷物運び、担架作り。ザイルを集合して準備が完了した。

七人が見守る中、私がトップとなって四人の特攻隊が彼を目指した。

壁の直前にきた。３０メートルはある。雪の具合を見ながらこわごわと進む。突き刺したピッケルが止まらない。「アッ」と思った瞬間、雪の中に落ちた。何も見えない。夢中でもがくが底がない。恐怖感が走る。突然、体が引っ張られた。ザイルを付けていたのも忘れていたのだった。

「オレのトップはこういうのが分かっていて決めたな」不格好に引き上げられた照れかくしに振り向いてこう叫んだ。

それから三十分の後、ザイルに縛りつけた彼を四人で抱えながら引き上げにかかった。二、三歩上がると二、三メートル後退する。その度、風に巻き上げられた雪が視界をさえぎり、白く濁った世界がしばらく続く。

「もしかしたら、このまま上がれないかも知れない」こんな思いがよぎって、不安とあせりをかりたてる。彼を抱える四人と、上でザイルを操作して引き上げる七人との格闘が一時間余り続いた。

無事救出した。肩と膝を骨折していたが意識はあった。

苦しい長い一夜が過ぎた。夜の明けるのを待って、凍てつく雪の中に三人が下界の民家に連絡にでた。外は頬が切れるような寒さだった。残った我々も、重傷の彼の体を戸板で作った担架にしばりつけて四人が交代で背負い、血の吐くような苦しいラッセルを繰返して、六時間後に下界から上ってきた救助の人たちと合流した。

何カ月かののち、彼は片足をちょっと引きずるようにして母親と学校に訪ねてきた。彼を取りまいて、再会の喜びに喚声をあげていた部員の横で母親はあたりかまわず泣きじゃくった。肩をたたきあい、手を握り合って笑っていた彼の顔からも涙がポロポロと落ちた。いつの間にか部員の顔もうつむき加減になり、我校で一二を争う猛者で悪の石野は後ろを向いてズボンのポケツトに手をつっこんだまま涙をしきりにこらえていた。

「ありがとうございました」と何度も繰り返して二人が校門を出ようと

したとき、私はとっさに右手を振り上げて叫んだ。

「校歌」

二十三名が一斉に歌い始めた校歌が校庭に響きわたった。ある者はうつむいたまま、ある者は目を赤くはらせたまま歌いつづけた。反抗期の中にあって、このときの校歌が一番うまく、一番一生懸命うたった校歌だった。

彼の嬉しそうな顔を見たとき、腰まで雪につかって血を吐くほど苦しかったラッセルも、ザイルとの格闘も、苦しく長かった一夜も、

「ああ、これでよかったのだ」と私は自分に言いきかせた。

強烈な遠い日の思い出である。

こんな思い出にひたりながら濃い青空に似合う草原に身を沈めて、雲の行く末をながめていると、赤トンボがカサカサと乾いた羽音をさせて耳もとをかすめた。

それはいつか山で聞いた落葉松の葉の散る音に似た、逝く秋の静かな音だった。

# 百名山

星野喜美子

今では百名山など、完登者は掃いて捨てる？ほどいるが、私の入会３年目頃はまだ珍しかった。当時話題になった時、私には関係ない話と聞き流していたが、また３年程たって渡部さんがそして芹沢さんが完登されたと聞き、早速　本を買って見て驚いた。

何と日本全国に点々と散らばる百の山、「ワースゴイ　これみんな登ったの、お金と暇が掛かったでしょうネ、私にはできないわ」

それでも幾つ登っているか、数えてみたら２２山登っていたので、ただ漠然と登るより目的をもったほうが良いと思い、遅ればせながら５０山を目標に始め、近い所をせっせと登り４年で目標達成。

次に７０山を目指したが、この頃から個人山行が出来なくなり、年に１～２山のペースになり、昨年やっと羅臼岳で目的を達した。

同行の小林さんは雌阿寒岳で６０山目。皆さんヤルナー。

芹沢さんの登頂証明は羨ましい、写真とは違い山で出会った人達の、共通の想いと温もりがあるから。いつかじっくりと見せて下さいね。

あと何年　幾つ登れるか解らないが、今年こそ南アへ　心は飛んでいるが一人では登れない、「同好の皆さんのご協力をお願い致します」ナンテ勝手な時ばかりお願いして、厚かましい？かな‥‥

支部も創立３５年その間、多勢の方々の努力と協力があったればこそ、他の会員が羨む素晴らしい横浜支部になったことと思います。

その先輩の方々に負けないよう、また長い間お世話になったお返しに、何か少しでもお役に立てればと願っております。

人生八十の時代、八十を過ぎてなお山登りを続けている方が何人も居ます、一緒に登りながら良いお話を伺い、さすが人生を無駄に過ごしてはいないと感心します、そして〝アア私もこんなふうに年を取りたい、だけど私には出来ない〟と自己嫌悪に陥るのです。

「私には私流の行き方があるのヨ」ナンテ開き直りの気持ちを捨てて、気負わず無理せず、自然体で山に登らせて戴こうと思います。

《憎まれっ子世にはばかる》命ある限りは支部のオジャマムシ、でいますので宜しくお願い致します。除名されないように会費の先払い、ナンテノないかナ　それも１０年分先払いは５０％引き　２０年は１００％で？

# 嗚呼！　ガリ版

熊谷松治

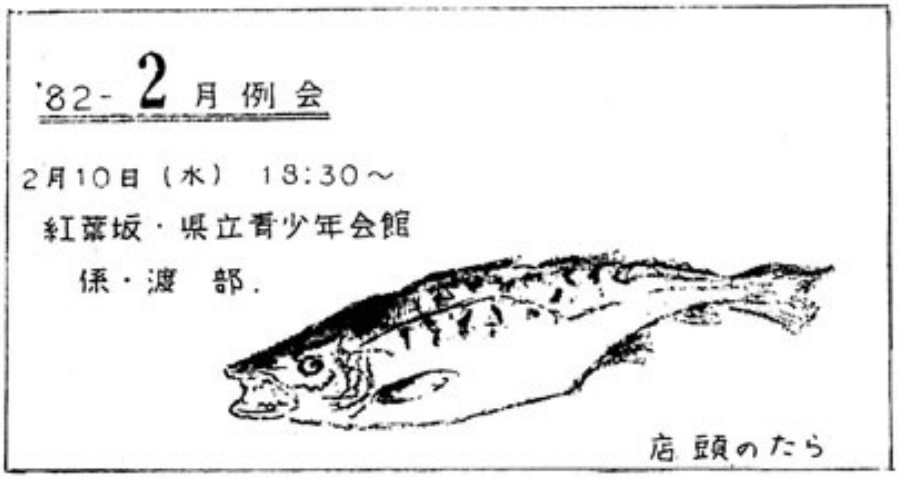
山の文集にどうしてガリ版の話をと、訝かる方もおられるでしょうが、かって簡易印刷と言えば、一番先に上げられるのがガリ版でした。学校、役所、会社、労組などどこにもあって、手軽に誰にも特別の技術がなくても、一応は出来たからです。

私が初めてガリ版の鉄筆を握ったのは、昭和24年頃、福島県の今のいわき市好間町（当時は村）で、定時制高校に通っていた時、「映画クラブ」の機関紙らしきものを作ったのが最初です。その後、郵便切手収集マニアの集り（郵趣会）の会報を毎月一回、２年位作ったでしょうか。全くの人まねと自己流で、『つぶし』などもやりました。

昭和35年、横浜に出てきて、市の成人学校で謄写印刷科の受講生を募集していることを知り、謄写印刷（孔版とも言う）の基本を学ぶ機会を得て、私なりに、色刷の年賀状などを作り、ひとり悦に入っていたのでした。それにしても、印刷器は昭和38年頃でも、6000円位と小遣いで買うには、ちょっと高いので、自分で木片など材料を買って作り、スクーリン（絹の布で目の粗いもの）だけは、材料屋で買って張り付けて出来上がりました。我ながらよく作ったものだと思ったことでした。

その後、「新ハイ」を知るに及んで、北村支部長のもとで、支部ニュース作りを手がけたのは、ご存じの通りです。昭和53年５月からです。このことは今年のニュース１月号にも、ちょっと書きましたので、又かと言われそうですが……。支部ニュースの作成は、今になってみれば、よくも10年近くも続けられたものだと、自分ながら感慨ひと入なものがあります。

私はガリ切りは早い方ではないので、一日中やってもＢ５で３頁ぐらいがやっとで、ペンで字を書くのと違って、謄原紙の下にヤスリ板を敷いて、その上から鉄筆でコスルように、細かい字を製版するのですから、指先から手首、腕、肩まで痛くなり、半透明の原紙に製版する




支部ニュース　57年1月号（ON. 270）のカットより

ので、目も疲れます。そんなわけで１ヶ月分の会報を作るのに、印刷も入れると３～４日は費やしていたようです。ですから、例会前の休日は予備日も入れると、４～５日はそれに当てていて、その間は、山にも行けなかったわけです。休日の朝は、目が覚めると４時でも５時でも起きて、鉄筆を握ったものです。でも原紙が出来上がり、最初に印刷してみるまでは、どんな出来か、これは本人にしか分からない、ささやかな楽しみではあります。

今のワープロは、打込みの途中でも印刷して見られるので、大変便利ですが、ガリ版の場合は、印刷するまでは、写真をうつして、それが仕上ってくるのを待つに似た、期待感のようなものがあります。

器材さえ手に入れば、年賀状ぐらいは孔版多色刷りで、やりたいのですが、もう売っている所がありません。活版印刷用の大缶は業者向きに売っていますが、色インクはふたをしていても、永く保存がきかなく、固まってしまい、それを溶かす方法がないのです。

私の下手なガリ版刷り年賀状でも、毎年楽しみにしていると言って下さる方が、２・３人いましたので、これも出来なくなることは、さみしいことです。手製の印刷器も私が生きている間は、捨てられず、押入れの奥を塞いでおり、カミさんから邪魔物扱いされています。ガリ版と山の話の関連性は、甚だ稀薄で申訳ありませんでした。

(93.1.30. －shc-no.8537)

# 横浜支部と私

星野　喜美子

私が初めて横浜支部の例会に出席したのは昭和54年10月、正式入会は55年3月でした。そして最初の山行が丹沢栗の木洞、小雨のなかを5名で黙々と歩き、その早さに付いてゆけず随分迷惑をかけました。

もう一度参加して駄目なら止めようと5月に浅間山へ、男性はYさんと主人だけ、女性8名で賑やかに登山禁止の山頂から火山館に下った。

この時のリーダー両Yさんの心暖まる、面倒見の良さに感激、以後ザックを背負って戴くなど、迷惑を掛けながら沢山の山へ登らせて戴いた。

入会した最初の冬には、那須三斗小屋へ連れていって戴き、素晴らしい雪山に魅せられ、3年続けて三斗小屋にはいった。

強風に転がされ地吹雪に立往生した峰の茶屋、好展望の朝日岳と行く度に姿を変える白銀に輝く峰々に恋し、以来正月は木曾駒　八ケ岳　安達太良等登り続け、5月の連休は雨飾山　燕岳　唐松　五竜　穂高　仙丈　巻機など残雪の山に登らせて戴いた。

今年は正月早々　木曾駒　車山　守屋山と3山を梯子し幸先良い山行のスタートをきることができました。

八ケ岳は別にして木曾駒7回　巻機山　安達太良6回とよく登った。思えばいつも良きリーダー良き先輩に恵まれ、いろいろな経験を通して"山とは"　"リーダーとはかくあるべき"等教えて戴き、お陰様で今の私があると感謝しています。

一時期〝横浜支部の三婆〟など言われながらIさん　Hさんと、鳥の鳴かぬ日はあっても、三婆の来ない日はないと言われる程参加していた。

それがいつの間にか二人は、より高度な山行へと翔んでいってしまった風の便りにHさんは今、ヒマラヤの麓の国に住むと言う。

山にたいする想いも、考えも登りかたも人それぞれ。翔べなかった私だがそれなりに、いまだに岩も沢も登らせて戴いているし、自分自身　結構満足して楽しい山行を続けている。

作夏　霞沢岳の山頂で「マア　なんて素晴らしいんでしょう、今病院で苦しんでいる人も居るでしょうに、私達はこんなに素晴らしい景色を眺められるなんて、本当に幸せですね」と言われた方がおりましたが同感です

健康で多勢の楽しい仲間が居て、好きな山に登れるなんてモー最高。

# ★　ＳＨＣ横浜支部の歩み　★

２０年前の昭和４８年２月に、ＳＨＣ横浜支部の扉を叩いた私には、創立当時の詳しい事実を知るよしもありません。あるのは、歴代の支部長から引き継がれてきた、創刊号からの「支部ニュース」のファイルが、唯一の手掛かりです。今回『しだ』第２９号を発刊するに当たって、改めてページを繰ってみて気がついたのは、支部の10周年、15周年の記念行事の年であります。それから逆算すると、創立は昭和31年ということになります。即ち、昭和46年８月に、創立15周年の記念キャンプとして、四十八瀬川において、係、竹田明、外で参加者25名。その中には山田さんや、横山勝利さんのお名前も見えます。昭和62年に、創立30周年として、塔の岳集中登山等の行事を行ったことは、まだ記憶に新しいですがが、62年（1986年）は実は31周年であったのです。甚だみっともない話ですが、事実は事実として分かった時点で改めるのが、よいと考え、前書きが長くなりましたが、分かる範囲で支部の歴史を振り返ってみたいとおもい、以下に記します。（文中の敬語は省かせて頂きます）文責・熊谷

昭和３１年　（1956年）　<u>支部創立</u>

３３年　（1958年）　４月１日より支部会則施行（支部代表）　中山　博

３３年　第３回支部山行「大菩薩峠」実施　係、平本和夫、石川和石

★８月16～17日　水無川キャンプ　Ｃ小川竜利　参加者12名

３４年　５月現在の会員数、34名　代表　中山　博

★11月　支部ニュース発刊　Ｂ５、４ページ　編集　影山　元芳

３５年度　代表　中山　博、委員　小川竜利、影山元芳　八田幹雄　斎藤清

★４月10日　第３回本部集中「川苔山」

３６年度　代表　八田幹雄　支部委員　小川竜利　斎藤　清　中山一重

３７年度　代表　八田幹雄　支部委員　中山一重　小川竜利　斎藤清　酒井国栄

３８年度　代表　小川竜利　顧問　浜野条治　加藤喜代子　委員　酒井国栄　落合正次　斎藤清　金子忠好　中山一重　影山元芳

３９年度　代表　小川竜利

★12月５～６日　支部山行１００回記念「伊豆・大滝温泉」

係　小川　参加者　４名

４０年度　代表　小川竜利

４１年度（１９６７）代表　影山元芳

★支部１０周年記念山行「塔ノ岳集中」（福祉山荘泊り）

係　影山　熊谷（幹）中山　鈴木　参加者　２１名

４２年度　代表　影山元芳　★11月に支部ニュース第１００号発行
昭和４３年度（1968）影山元芳
４４年度　代表　影山元芳
４５年度　代表　鈴木国之
４６年度（1971）代表　竹田　明
★８月21～22日支部創立１５周年記念キャンプ　「四十八瀬川」
係　竹田　明　外　参加者　２５名
★９月12日　支部山行第２００回「平標山」係　善波　渡辺（三）
参加者　５名
４７年度　代表　山田　進
４８年度　代表　山田　進
４９年度　代表　山田　進
５０年度　代表　鈴木国之
５１年度　代表　碇　清人　　（支部会員数　２９名）
５２年度　代表　碇　清人
★52年４月号（Ｎｏ，212 ）より支部ニュースがはがき判となる
昭和５３年度（1978年）代表　北村　襄
★53年５月号（ＮＯ 226）より「支部ニュース」もとのＢ５ガリ版刷りとなる。（編集・熊谷　昭和62年12月　ＮＯ,341まで）
★昭和63年１月号（ＮＯ,342）より支部ニュース、ワープロ製版となる。（編集・茂木武）
５３年度（1978）～平成元年度（1989）まで１２年間、支部長　北村　襄
５７年　★４月　『歯朶』第２６号発行（謄写版刷りＢ５　５４頁
５９年　★12月　『歯朶』第２７号発行（謄写版刷りＢ５　３８頁
平成元年　★12月　『歯朶』第２８号発行（ワープロ製版Ｂ５　４６頁）
平成　２年度（1990）　支部長　熊谷松治　～平成５年度まで
平成４年　★11月　「支部ニュース」（11月号）第４００号発行
５年　★３月２８日　支部山行　第７００回「大楠山」係　芹沢
★３月　文集『歯朶』ＮＯ，２９　発行（ワープロ製版Ｂ5,71頁）

…… 昭和５０年度（1975）　支部山行記録 …… 支部代表　鈴木国之 ……

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ４月 | ６日 | 三ッ峠山（本部集中）（厭） | 久保田治 | 12 | 12 |
| | | | （４月の支部例会出席者　９名） | | |
| ５月 | 25日 | 鍋割山 | 朝倉 | 5 | 5 |
| ６月 | ８日 | 那須・南月山 | 駒田日出子 | 5 | 5 |
| ７月 | ５～６日 | 火打・妙高山 | 石井春男 | 9 | 18 |
| ８月 | 31日 | 水無川本谷 | 石川一男 | 2 | 2 |
| ９月 | 24日 | 御坂主脈縦走 | 横山利勝 | 雨天中止 | |
| 10月 | 18～19日 | 巻機山 | 山田　進 | 3 | 6 |
| 11月 | 16日 | 守屋山 | 脇美英子 | 6 | 6 |
| 12月 | 14日 | 十枚山 | 善波英雄 | 中止 | |
| 昭和５１年 | | | | | |
| １月 | 15日 | 神楽山（本部合同） | 久保田・鈴木(国) | 25 | 25 |
| | 18日 | 経ヶ岳・仏果山 | 脇 | 中止 | |
| ２月 | 22日 | 生藤山 | 碇　清人 | 3 | 3 |
| ３月 | 20～21日 | 北八ッ・天狗岳 | 碇 | 1 | 2 |

◆　昭和５０年度　山行回数　１３回　　計　５９名　延８４人

…… 昭和５１年度（１９７６）…… 支部代表　碇　清人 ……

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ４月 | ４日 | 陣馬山（本部集中） | 久保田 | 6 | 6 |
| | 18日 | 浅間山 | 脇 | 2 | 2 |
| ５月 | 16日 | 上州・三峰山 | 脇 | 4 | 4 |
| | 30日 | 大山 | 鈴木（国） | 雨天中止 | |
| ６月 | ４～５日 | 越後駒ケ岳 | 山田　進 | 3 | 6 |
| | 13日 | 三の塔 | 鈴木（国） | 1 | 1 |
| ７月 | ３～４日 | 磐梯山 | 鈴木（英） | 4 | 8 |
| | 25～27日 | 穂高岳 | 脇 | 3 | 9 |
| ８月 | 21～22日 | 大菩薩峠 | 碇 | 5 | 10 |
| ９月 | 25～26日 | 出羽三山（両夜行） | 久保田 | 中止 | |
| 10月 | 10日 | 谷川岳 | 石川一男 | 雨天中止 | |
| 11月 | ３日 | 笹子・雁ケ腹摺山(棒調) | 鈴木国・駒田 | 41 | 41 |
| | 13～14日 | 両神山 | 山田　進 | 3 | 6 |
| 12月 | 12日 | 御坂黒岳 | 横山 | 中止 | |
| 昭和５２年 | | | | | |
| １月 | ８～９日 | 北横岳 | 久保田 | 3 | 6 |
| | 22～23日 | 入笠山 | 脇 | 2 | 4 |
| ２月 | ６日 | 大山三峰山 | 北村・脇 | 6 | 6 |

５３年度

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 7月 | 8日 | 小松原湿原 | 太田（繁） | 7 | 7 |
| | 21～23日 | 早池峰山 | 駒田 | ? | ? |
| 8月 | 5～8日 | 飯豊山 | 碇 | 3 | 12 |
| 9月 | 10日 | 岩殿山 | 脇 | 3 | 3 |
| | 24～25日 | 出羽三山 | 久保田 | 4 | 8 |
| 10月 | 28～29日 | 雨飾山 | 山田 | 天候不順の為中止 | |
| 11月 | 11～12日 | 蓼科山 | 脇 | 7 | 14 |
| | 26日 | 高川山 | 宮崎（順） | 3 | 3 |
| 12月 | 2～3日 | 雪山丹沢滝沢キャンプ場 | 横山 | 14 | 28 |

昭和５４年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1月 | 21日 | 百蔵山 | 太田 | 8 | 8 |
| 2月 | 18日 | 鐘が岳 | 北村 | 5 | 5 |
| 3月 | 4日 | 高松山 | 脇 | 8 | 8 |

◆ 昭和５３年度　山行回数　１９回　　計　９３名　延　１４６人

…… ★昭和５４年度（１９７９）…… 支部代表　北村　襄 ……

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 4月 | 1日 | 明神ヶ岳（本部集中） | 北村 | 16 | 16 |
| | 15日 | 武甲山 | 脇 | 5 | 5 |
| | 22日 | 五郎山（本部合同） | 太田 | 14 | 14 |
| 5月 | 20日 | 丹沢・三峰 | 横山 | 7 | 14 |
| | 27日 | 物見峠 | 小宮 | 4 | 4 |
| 6月 | 2～3日 | 会津駒ケ岳 | 碇 | 中止 | |
| | 9～10日 | 白毛門 | 横山 | 4 | 8 |
| 7月 | 1日 | 男体山 | 脇 | 7 | 7 |
| | 21～22日 | 恵那山 | 吉村 | 2 | 4 |
| 8月 | 2～7日 | 朝日連峰 | 碇 | 2 | 12 |
| 9月 | 15～16日 | 那須・茶臼岳・朝日岳 | 横山 | 6 | 12 |
| 10月 | 14日 | 西沢渓谷 | 北村 | 9 | 9 |
| 11月 | 11月 | 高松山 | 北村 | 雨天中止 | |
| 12月 | 1～2日 | 雪山水無川キャンプ場 | 朝倉・横山 | 12 | 24 |
| | 16日 | 三浦海岸 | 朝倉 | 10 | 10 |

昭和５５年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1月 | 13～15日 | 安達太良 | 脇 | 6 | 18 |
| 2月 | 9～11日 | 石打（スキー） | 山田・脇 | 5 | 15 |
| | 10～11日 | 七面山（本部合同） | 横山 | 23 | 23 |
| | 17日 | 矢倉岳 | 太田 | 7 | 7 |

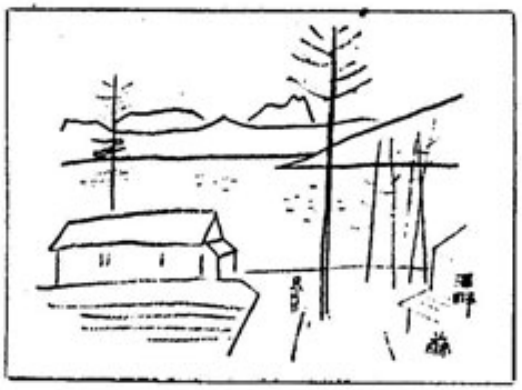
昭和５５年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ３月 | ２日 | 鋸山 | 脇 | ７ | ７ |
| | 16日 | 大山北尾根 | 小宮 | ５ | ５ |
| | 30日 | 倉岳山(第342回) | 熊谷 | ７ | ７ |

◆ 昭和５４年度　山行回数　２２回(内、中止1回)　　計１３９名　延２２１人

支部創立35周年の記念事業の一つとして、文集「しだ」発行の話があってから、星野前副支部長が、私が支部に入ってからの、毎年度の支部山行の記録を載せましょうか、と、申出があり、では私も自分が入ってから、星野さんの入るまでの分を出来たらやってみましょうと、支部ニュースのバックナンバーを、繰ってみました。

途中抜けている所があったり、一時期、はがき判で発行していて、山行報告が全然記録されていない等、資料としての価値は少ないかも知れませんが、会員皆さんの個人的な記録や、メモなどで補っていただいて、次回また機会がありましたら、より完全に近い資料の一助となればと思い、ここに発表した次第です。それにしても、こうして纏める段になってみると、山行報告の期日、行き先、係、参加者名、等の一つでも抜けていると、「新ハイ」の当時の“支部の動き”欄を探したりしてけっこう大変な仕事でした。又、これは支部ニュースを作る者の自省ですが、一度計画された山行が、結果が出ていないのは、雨で中止になったのか、係の都合で止めたのか、参加者がなかったのか、後で知るよしもないのです。（熊谷）



# 昭和５５年度　支部山行

| 月　日 | 山　行　場　所 | 係り | 参加者 |
|---|---|---|---|
| ４　月 | | | |
| ６日 | 高尾山　城山　（本部集中） | 北村 | １１ |
| 20日 | 栗ノ木洞 | 太田 | 5 |
| ５　月 | | | |
| 25日 | 浅間山 | 脇 | １０ |
| ６　月 | | | |
| ８日 | 谷川岳 | 横山 | 7 |
| 21～22日 | 根子岳　四阿山 | 芹沢 | 4 |
| ７　月 | | | |
| 13日 | 櫛形山 | 鈴木 | 5 |
| 26～28日 | 北ア　餓鬼岳 | 朝倉 | 2 |
| １０　月 | | | |
| 19日 | 妙義山（前夜発） | 脇 | 5 |
| １１　月 | | | |
| ２～３日 | 鎌ケ岳　御在所岳 | 横山 | 7 |
| ９日 | 雨乞岳　（本部合同） | 太田 | １０ |
| １２　月 | | | |
| | 丹沢大倉ｷｬﾝﾌﾟ場　忘年山行（小草平ノ沢） | 横山 | １２ |
| 昭和５６年 | | | |
| １　月 | | | |
| 18日 | 九鬼山 | 脇 | １２ |
| ２　月 | | | |
| 15日 | 入笠山　（前夜発） | 横山 | 8 |
| ３　月 | | | |
| １日 | 大山　浅間尾根 | 熊谷 | 8 |
| 14～15日 | 安達多良山　（本部合同） | 小宮 | 9 |

合計山行回数　１５回

合計参加人員　１１５名

# 昭和５６年度　支部山行

| 月　日 | 山　行　場　所 | 係り | 参加者 |
|---|---|---|---|
| ４　月 | | | |
| 12日 | 三ツ峠山 | 脇 | １０ |
| ５　月 | | | |
| 23～24日 | 菅平高原　根子岳 | 渡部 | 4 |
| ６　月 | | | |
| ７日 | 平標山　仙ノ倉山（前夜発） | 横山 | 8 |
| ９　月 | | | |
| 27日 | 角落山　（本部合同） | 太田 | 6 |
| １０　月 | | | |
| 25日 | 川苔山 | 北村 | 6 |
| １１　月 | | | |
| 15日 | 浜石岳 | 太田 | 7 |
| １２　月 | | | |
| 5～6日 | 大倉ｷｬﾝﾌﾟ場　忘年山行（モミソ沢） | 横山 | １３ |
| 20日 | シダンゴ山 | 熊谷 | 6 |
| | 昭和５７年 | | |
| １　月 | | | |
| 31日 | 幕山　南郷山 | 北村 | 9 |
| ２　月 | | | |
| 27~28日 | 安達太良山　（本部合同） | 小宮 | １０ |
| ３　月 | | | |
| 14日 | 矢平山 | 熊谷 | 3 |
| 21～22日 | 七面山 | 横山 | 5 |

合計山行回数　１２回

合計参加者　８７名

# 昭和５７年度　支部山行

| 月　日 | 山　行　場　所 | 係り | 参加者 |
|---|---|---|---|
| ４　月 | | | |
| ４日 | 大塚山　（本部集中） | 北村 | 9 |
| 24～25日 | 雁ケ腹摺山 | 藤坂 | １４ |
| ５　月 | | | |
| 23日 | 滝子山 | 熊谷 | 7 |
| ６　月 | | | |
| ６日 | 黒桧岳　社山 | 太田 | 2 |
| ７　月 | | | |
| 3～4日 | 篭ノ登山　湯ノ丸山 | 渡部 | 9 |
| ８　月 | | | |
| 14～15日 | 八ケ岳　赤岳 | 太田 | 4 |
| ９　月 | | | |
| 15日 | 茅ケ岳（集合後雨で中止　星野宅でﾀﾞﾍﾞﾘﾝｸﾞ） | 藤坂 | 7 |
| 19日 | 茅ケ岳 | 藤坂 | 3 |
| １０　月 | | | |
| 17日 | 湘南　二子山　（ＭＧＫ合同） | 太田 | ２６ |
| １１　月 | | | |
| ３日 | 御陵山　天狗山　（本部合同） | 太田 | 7 |
| １２　月 | | | |
| 4～5日 | 大倉ｷｬﾝﾌﾟ場　忘年山行　（小草平ノ沢） | 横山 | １５ |
| 12日 | 十二ケ岳　鬼ケ岳 | 藤坂 | 5 |
| 昭和５８年 | | | |
| １　月 | | | |
| ９日 | 箱根　三国山 | 太田 | １０ |
| ２　月 | | | |
| 20日 | 高柄山　矢の根峠 | 熊谷 | 9 |
| ３　月 | | | |
| 12～13日 | 杓子山（幸明館泊　雨のため保坂宅でﾀﾞﾍﾞﾘﾝｸﾞ） | 北村 | 9 |

合計山行回数　１６回
参加者　１３４名

## 昭和５８年度　支部山行

| 月　日 | 山　行　場　所 | 係り | 参加者 |
|---|---|---|---|
| ４　月 | | | |
| ３日 | 大野山　（本部集中）おでん | 北村 | １４ |
| ５　月 | | | |
| 7～8日 | 両神山　八丁峠 | 星野 | １２ |
| 14～15日 | 安達太良山　（本部合同） | 小宮 | １２ |
| ６　月 | | | |
| 12日 | 白毛門　笠ケ岳　（前夜発） | 横山 | 8 |
| ７　月 | | | |
| 2～3日 | 東沢　甲武信岳 | 石原 | １２ |
| 16～17日 | 櫛形山 | 渡部 | １１ |
| ９　月 | | | |
| ４日 | 日向山　ﾊﾞｰﾍﾞｷｭｰ　（前夜発尾白ｷｬﾝﾌﾟ場泊） | 星野 | １２ |
| 24～25日 | 巻機山 | 横山 | １１ |
| １０　月 | | | |
| 9～10日 | 大白川　浅草岳 | 山田 | 4 |
| 16日 | 三浦富士　（ＭＧＫ合同　雨のため減） | 藤坂 | 5 |
| 22～23日 | 尾瀬　笠ケ岳　至仏山 | 藤坂 | 4 |
| １１　月 | | | |
| 16日 | 高田山　（本部合同） | 太田 | 6 |
| 23日 | 天子ケ岳　長者ケ岳 | 沢野 | １２ |
| １２　月 | | | |
| 3～4日 | 杓子山　鹿止山　忘年山行 | 北村 | １８ |
| 18日 | 大山　三ツ峰 | 保坂 | １１ |
| 昭和５９年 | | | |
| １　月 | | | |
| ８日 | 辺室山 | 小宮 | １２ |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 2 月 | | | |
| 5日 | 高畑山　大桑山 | 熊谷 | 15 |
| 11～12日 | 七面山 | 横山 | 8 |
| 3 月 | | | |
| 4日 | 高尾山　城山 | 藤坂 | 5 |
| 18日 | 伊予ケ岳　富山 | 太田 | 11 |

合計山行回数　２０回
参加者　２０１名

## 昭和５９年度　支部山行

| 月　日 | 山　行　場　所 | 係り | 参加者 |
|---|---|---|---|
| 4 月 | | | |
| 1日 | 関八州見晴台　（本部集中）焼肉 | 北村 | 5 |
| 8日 | 扇山　てんぷら山行 | | |
| 5 月 | | | |
| 13日 | 大峰山　吾妻耶山 | 太田 | 2 |
| 26～27日 | 御坂　黒岳 | 保坂 | 7 |
| 6 月 | | | |
| 3日 | 鷹ノ巣山　（本部合同） | 藤坂 | 17 |
| 23～24日 | 大白川　浅草岳 | 山田 | 4 |
| 7 月 | | | |
| 1日 | 茅ケ岳 | 藤坂 | 7 |
| 8日 | 荒沢岳 | 横山 | 8 |
| 9 月 | | | |
| 2日 | 大倉ﾊﾞｰﾍﾞｷｭｰ 会報300号記念しだ発刊を祝して | 星野 | 23 |
| 10 月 | | | |
| 6～7日 | 加入道　畦ケ丸 | 遠藤 | 7 |
| 10日 | 鎌倉アルプス | 太田 | 6 |
| 11 月 | | | |
| 3日 | 光兎山　（本部合同）前夜発 | 太田 | 2 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 11日 | 裏高尾縦走 | 飯島 | 7 |
| １２ | 月 | | |
| 1～2日 | 鍋割山　忘年山行 | 北村 | １６ |
| 16日 | 駒ケ岳　神山　おでん山行 | 星野 | １７ |
| | 昭和６０年 | | |
| １ | 月 | | |
| ６日 | 花咲山 | 太田 | 6 |
| 20日 | 南高尾 | 熊谷 | １８ |
| ２ | 月 | | |
| 2～3日 | 大菩薩　（本部合同） | 藤坂 | ２０ |
| 24日 | 茅ケ岳 | 横山 | １０ |
| ３ | 月 | | |
| 10日 | 矢倉岳 | 北村 | １０ |
| 31日 | 高松山　シダンゴ山 | 遠藤 | 9 |

合計山行回数　２１回
参加者　２１８名

## 昭和６０年度　支部山行

| 月　日 | 山　行　場　所 | 係り | 参加者 |
|---|---|---|---|
| ４ | 月 | | |
| ７日 | 大岳山　（本部集中）　焼肉 | 北村 | 9 |
| 21日 | 御前山　てんぷら山行 | 石原 | ２６ |
| ５ | 月 | | |
| 12日 | 高川山 | 熊谷 | １２ |
| 18～19日 | 鷹ノ巣山　（本部合同） | 藤坂 | 7 |
| ６ | 月 | | |
| 1～2日 | 天城山縦走 | 星野 | １７ |
| 22～23日 | 安達太良山 | 沢野 | 4 |
| ７ | 月 | | |
| 6～7日 | 大白川　守門岳 | 山田 | 3 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 20～21日 | 仙丈ケ岳 | 北村 | 9 |
| 8 月 | | | |
| 25日 | モミソ沢 | 御園 | 15 |
| 9 月 | | | |
| 8日 | 鐘ケ岳　弁天ノ森 バーベキュー | 星野 | 27 |
| 21～22日 | 大源太山 | 横山 | 11 |
| 28～29日 | 加入道　畦ケ丸 | 遠藤 | 8 |
| 10 月 | | | |
| 20日 | 鍋割山　（本部合同） | 横山 | 30 |
| 11 月 | | | |
| 10日 | 筑波山 | 石原 | 14 |
| 17日 | 大山　三ツ峰 | 北村 | 13 |
| 12 月 | | | |
| 7～8日 | 金時山　忘年山行 | 北村 | 19 |
| 15日 | 殿平山　（本部合同） | 太田 | 33 |
| | 昭和61年 | | |
| 1 月 | | | |
| 19日 | 白山　巡礼峠　おでん山行 | 星野 | 34 |
| 2 月 | | | |
| 9日 | 畠山　二子山 | 遠藤 | 24 |
| 15～16日 | 丹沢　三ツ峰 | 保坂 | 6 |
| 3 月 | | | |
| 9日 | 徳倉山　鷲津山　沼津アルプス（本部合同） | 横山 | 28 |
| 30日 | 笹子　雁ケ腹摺山 | 熊谷 | 19 |

合計山行回数　22回
参加者　358名

## 昭和61年度　支部山行

| 月　日 | 山　行　場　所 | 係り | 参加者 |
|---|---|---|---|
| 4 月 | | | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 20日 | 陣馬山　（本部集中） | 北村 | 9 |
| 27日 | 高松山　てんぷら山行 | | 25 |
| 5月 | | | |
| 11日 | 滝子山 | 熊谷 | 7 |
| 25日 | 桧洞丸 | 石原 | 6 |
| 6月 | | | |
| 7～8日 | 白毛門　清水峠 | 横山 | 12 |
| 22日 | 甘利山　千頭星　バーベキュー山行 | 星野 | 20 |
| 7月 | | | |
| 5～6日 | 大白川 | 山田 | 6 |
| 13日 | 白山　巡礼峠 | 遠藤 | 4 |
| 18～21日 | 早池峰山　秋田駒ケ岳 | 御園 | 9 |
| 9月 | | | |
| 6～7日 | 乗鞍岳　御嶽山 | 星野 | 30 |
| 14～15日 | 信州　沓掛温泉 | 長谷川 | 8 |
| 10月 | | | |
| 4～5日 | 加入道　畦ケ丸 | 遠藤 | 7 |
| 18～19日 | 鳳凰三山 | 藤坂 | 13 |
| 26日 | 愛鷹山 | 石原 | 20 |
| 11月 | | | |
| 2～3日 | 飛竜山　（本部合同） | 藤坂 | 24 |
| 9日 | 滝子山 | 石原 | 11 |
| 16日 | 仏果山　経ケ岳 | 北村 | 12 |
| 12月 | | | |
| 6～7日 | 寄　シダンゴ山　忘年山行 | 北村 | 19 |
| | 昭和62年 | | |
| 1月 | | | |
| 11日 | 大山初詣 | 御園 | 19 |
| 18日 | 大山東南稜　おでん山行 | 星野 | 34 |
| 25日 | 大楠山 | 長瀬 | 20 |
| 2月 | | | |
| 8日 | 逗葉山稜　（本部合同） | 遠藤 | 51 |
| 15日 | 湖尻　乙女峠 | 長谷川 | 13 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 22日 | 岳ノ台　菩堤峠 | 遠藤 | 9 |
| 3 月 | | | |
| 8日 | 八王子城址 | 熊谷 | 9 |
| 22日 | 御岳　吉野場梅郷 | 中島 | 12 |

合計山行回数　２６回
参加者　３９９名

## 昭和６２年度　支部山行

| 月　日 | 山　行　場　所 | 係り | 参加者 |
|---|---|---|---|
| 4 月 | | | |
| 19日 | 三ツ峠　（本部集中）焼肉 | 北村 | 13 |
| 29日 | 長峰　南山 | 遠藤 | 23 |
| 5 月 | | | |
| 10日 | 大蔵高丸 | 太田 | 5 |
| 16～17日 | 春の信濃路 | 長谷川 | 9 |
| 24日 | 天城　万三郎 | 沢野 | 13 |
| 31日 | 桧洞丸 | 石原 | 14 |
| 6 月 | | | |
| 6～7日 | 金峰山　瑞牆山　（前夜発） | 星野 | 15 |
| 13～14日 | 大白川　八十里越え | 山田 | 6 |
| 7 月 | | | |
| 11～12日 | 大源太山 | 横山 | 6 |
| 18～19日 | 磐梯山　安達太良山 | 星野 | 28 |
| 8 月 | | | |
| 22～23日 | 北ア 餓鬼岳 | 山田 | 4 |
| 9 月 | | | |
| 6日 | 荒崎シーサイド | 石原 | 12 |
| 27日 | 鍋割山 | 台 | 7 |
| 10 月 | | | |
| 4～5日 | 西吾妻連峰 | 沢野 | 11 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 25日 | 乾徳山 | 北村 | 11 |
| 11月 | | | |
| 8日 | 明神岳　明星岳　（本部合同） | 北村 | 23 |
| 22～23日 | 丹沢集中登山　支部創立30周年記念 | 御園 | 33 |
| 12月 | | | |
| 5～6日 | 丹沢　寄　忘年山行 | 北村 | 20 |
| 20日 | 箱根　屏風山 | 太田 | 10 |
| | 昭和63年 | | |
| 1月 | | | |
| 10日 | 矢倉岳　おでん山行 | 星野 | 26 |
| 17日 | 石老山　石砂山　とん汁山行 | 熊谷 | 33 |
| 2月 | | | |
| 14日 | 金沢　天園　（本部合同） | 石原 | 38 |
| 27～28日 | 北八ツ周辺の雪山 | 山田 | 11 |
| 3月 | | | |
| 6日 | 長者ケ岳　天子ケ岳 | 沢野 | 13 |
| 21日 | 日ノ出山　吉野梅郷 | 中島 | 8 |
| 27日 | 明神岳　（前夜発） | 沢野 | 4 |

合計山行回数　26回
参加者　396名

## 昭和63年度　支部山行

| 月　日 | 山　行　場　所 | 係り | 参加者 |
|---|---|---|---|
| 4月 | | | |
| 3日 | かたくりの里 | 中島 | 9 |
| 17日 | 武川岳　（本部集中） | 北村 | 19 |
| 24日 | 大山南稜　てんぷら山行 | 石原 | 18 |
| 5月 | | | |
| 3～4日 | 両神山 | 茂木 | 11 |
| 21～22日 | 大滝根山　背戸峨廊 | 熊谷 | 12 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 29日 | 桧洞丸 | 石原 | 11 |
| 6月 | | | |
| 4～5日 | 十文字峠　甲武信岳 | 星野 | 15 |
| 19日 | 高水山　棒ノ折 | 台 | 13 |
| 25～26日 | 大白川　守門岳　浅草岳 | 山田 | 9 |
| 7月 | | | |
| 10日 | 日光　霧降高原 | 石原 | 8 |
| 16～17日 | 鳥海山　月山 | 星野 | 22 |
| 30～31日 | 尾瀬　燧岳　会津駒ケ岳 | 沢野 | 7 |
| 9月 | | | |
| 11日 | 三浦海岸　ﾊﾞｰﾍﾞｷｭｰ | 長谷川 | 12 |
| 10月 | | | |
| 8～9日 | 吾妻連峰 | 沢野 | 7 |
| 16日 | 矢倉岳　洒水の滝　（本部合同） | 北村 | 40 |
| 22～23日 | 万座　本白根山 | 小倉 | 7 |
| 11月 | | | |
| 6日 | 奥御岳渓谷 | 石原 | 14 |
| 20日 | 丹沢　長尾尾根 | 北村 | 11 |
| 27日 | 丹沢　桧岳 | 石原 | 16 |
| 12月 | | | |
| 3～4日 | 三浦海岸　忘年山行 | 北村 | 19 |
| 18日 | 御前山 | 太田 | 7 |
| 平成元年 | | | |
| 1月 | | | |
| 2日 | 金時山 | 熊谷 | 4 |
| 8日 | 大野山　おでん山行（雨　星野宅でﾀﾞﾍﾞﾘﾝｸﾞ） | 星野 | 22 |
| 22日 | 鷲津山　徳倉山 | 小池 | 3 |
| 28～29日 | 大菩薩峠 | 山田 | 6 |
| 2月 | | | |
| 5日 | 南郷山　幕山　城山 | 小池 | 14 |
| 26日 | 荒崎　ｼｰｻｲﾄﾞｺｰｽ　（本部合同） | 北村 | 21 |
| 3月 | | | |
| 5日 | 逗子　鎌倉 | 石原 | 18 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 19日 | 日ノ出山　吉野梅郷 | 中島 | 11 |
| 26日 | 駿河の山 | 太田 | 3 |

合計山行回数　30回
参加者　389名

## 平成元年　支部山行

| 月　日 | 山　行　場　所 | 係り | 参加者 |
|---|---|---|---|
| 4　月 | | | |
| 2日 | 大閤一夜城（石垣山） | 熊谷 | 17 |
| 9日 | かたくりの里 | 中島 | 12 |
| 23日 | 丹沢　塔ノ岳　（本部集中） | 石原 | 7 |
| 30日 | 生藤山　和田峠 | 石原 | 11 |
| 5　月 | | | |
| 21日 | 倉岳山 | 熊谷 | 8 |
| 28日 | 桧洞丸 | 石原 | 6 |
| 6　月 | | | |
| 3～4日 | 安達太良山　東吾妻山 | 沢野 | 14 |
| 10～11日 | 大白川　（前夜発） | 山田 | 5 |
| 18日 | 御坂　黒岳　（前夜発） | 横山 | 5 |
| 7　月 | | | |
| 2日 | 大山三ツ峰山 | 北村 | 8 |
| 22～23日 | 巻機山　平標山 | 星野 | 12 |
| 8　月 | | | |
| 13日 | 富士山　（前夜発） | 山田 | 12 |
| 18～21日 | 北ア　黒部五郎岳　笠ケ岳（前夜発） | 山田 | 4 |
| 9　月 | | | |
| 10日 | 岩殿山 | 熊谷 | 8 |
| 14～16日 | 黒部　下ノ廊下　（前夜発） | 山田 | 3 |
| 22～23日 | 戸隠山　高妻山　（前夜発） | 長谷川 | 6 |
| 29～1日 | 栗駒山　（前夜発） | 沢野 | 7 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| １０ | 月 | | |
| 7～8日 | 苗場山　越後駒ケ岳　（前夜発） | 星野 | 7 |
| 10日 | 高畑山　秋山二十六夜山 | 大島 | 2 |
| 15日 | 高松山　ｼﾀﾞﾝｺﾞ山（本部合同） | 北村 | ３８ |
| 29日 | 西原峠　三国峠 | 石原 | １３ |
| １１ | 月 | | |
| 3～4日 | 大白川周辺の山　（前夜発） | 山田 | 6 |
| 12日 | 大室山　加入道山 | 御園 | 9 |
| 19日 | 雁ケ腹摺山 | 大島 | 5 |
| 26日 | 笹尾根 | 石原 | １２ |
| １２ | 月 | | |
| 2～3日 | 丹沢　忘年山行 | 北村 | ２０ |
| 17日 | 大山三ツ峰 | 北村 | 8 |
| | 平成２年 | | |
| １ | 月 | | |
| 14日 | 高尾山　南高尾山稜　とん汁山行 | 熊谷 | １３ |
| 21日 | 逗子畠山　二子山 | 芹沢 | １０ |
| 28日 | 矢倉岳 | 北村 | 7 |
| ２ | 月 | | |
| 17～18日 | 北八ツ　高見石　天狗岳 | 平沢 | 5 |
| 25日 | 逗子　鎌倉 | 石原 | ２０ |
| ３ | 月 | | |
| 18日 | 日ノ出山　吉野梅郷 | 石原 | 5 |
| 25日 | 房総　鋸山　（本部合同） | 北村 | ２３ |

合計山行回数　３４回

参加者　３４８名

# 平成２年度　支部山行

| 月　日 | 山　行　場　所 | 係り | 参加者 |
|---|---|---|---|
| ４　月 | | | |
| ８日 | 東漸寺　称名寺 | 熊谷 | 9 |
| 15日 | 棒ノ折山　（本部集中） | 熊谷 | １２ |
| 22日 | 日光　鳴虫山 | 沢野 | １１ |
| 29日 | 不老山　てんぷら山行 | 石原 | 6 |
| ５　月 | | | |
| 13日 | 三頭山 | 石原 | １３ |
| 20日 | 三浦海浜バーベキュー | 長谷川 | ２４ |
| 26～27日 | ユーシンロッジ　桧洞丸 | 石原 | 7 |
| ６　月 | | | |
| 2～3日 | 会津　松倉山　七ケ岳 | 星野 | 8 |
| 17日 | 飯盛山と小海線の旅 | 芹沢 | 8 |
| ７　月 | | | |
| 21～23日 | 焼石連峰縦走　（前夜発） | 沢野 | １０ |
| ８　月 | | | |
| 12～15日 | 北ア　薬師岳　五色ケ原 | 星野 | 3 |
| ９　月 | | | |
| ９日 | 青春１８切符で行く伊吹山 | 星野 | 8 |
| 30日 | ＭＧＫ合同山行（雨　星野宅でﾀﾞﾍﾞﾘﾝｸﾞ） | 熊谷 | ２０ |
| １０　月 | | | |
| 14日 | 明星ケ岳　塔ノ峰 | 熊谷 | 6 |
| 20～21日 | 那須三本槍岳　甲子山 | 横山 | 7 |
| １１　月 | | | |
| 3～4日 | 塔ノ峰　矢倉沢峠 | 長谷川 | 3 |
| 10～11日 | 四尾連湖　精進湖 | 鎌田 | １０ |
| 18日 | 弘明寺　三渓園　（本部合同） | 熊谷 | １６ |
| １２　月 | | | |
| ９日 | 毛無山　十二ケ岳　鬼ケ岳 | 星野 | １４ |
| 22～23日 | 宮地山　橋倉鉱泉　忘年山行 | 熊谷 | ２０ |

平成３年

| | | | |
|---|---|---|---|
| １　月 | | | |
| ６日 | 長尾峠　金時山 | 頼角 | １７ |
| 13日 | 幕山　南郷山 | 北村 | ９ |
| 15日 | 奥多摩　鹿倉山 | 茂木 | ９ |
| 20日 | 子安の里　おでん山行 | 鎌田 | ２０ |
| ２　月 | | | |
| ３日 | 丹沢　高取山　華厳山 | 祖父川 | ６ |
| 16～17日 | 入笠山　（雪山入門） | 星野 | １３ |
| 24日 | 丹沢　栗の木洞　（本部合同） | 熊谷 | １２ |
| ３　月 | | | |
| ３日 | 阿部倉山　田浦梅林 | 石原 | １９ |
| 10日 | 榛名外輪山 | 長谷川 | ９ |
| 17日 | 城山　発端丈山 | 熊谷 | ６ |
| 24日 | 静岡　竜爪山 | 小池 | １２ |

合計山行回数　３１回
参加者　３４７名

## 平成３年度　支部山行

| 月　日 | 山　行　場　所 | 係り | 参加者 |
|---|---|---|---|
| ４　月 | | | |
| ７日 | 鎌倉　六国見山　稲村ケ崎 | 芹沢 | １０ |
| 13～14日 | 篠井山　思親山 | 鎌田 | １１ |
| 21日 | 札掛　物見峠　てんぷら山行 | 石原 | １８ |
| 27～28日 | 南ア　山伏　八紘嶺 | 台 | ９ |
| ５　月 | | | |
| 12日 | 高麗山　湘南平　（ＭＧＫ合同） | 熊谷 | ５３ |
| 19日 | 皇鈴山　登谷山　（本部集中） | 熊谷 | ７ |
| 25～26日 | 丹沢　桧洞丸　（主稜縦走） | 石原 | ８ |
| ６　月 | | | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 7～9日 | 虎毛山　高松山　（前夜発） | 沢野 | 10 |
| 14～16日 | 庚申山　皇海山 | 石原 | 4 |
| 23日 | 鎌倉散策 | 熊谷 | 12 |
| 7月 | | | |
| 7日 | 鐘ケ岳北尾根 | 祖父川 | 10 |
| 20～21日 | 早池峰山 | 小池 | 10 |
| 8月 | | | |
| 1～5日 | 北ア　水晶岳　鷲羽岳　（前夜発） | 平沢 | 8 |
| 17～18日 | 北八ツ　蓼科山　北横岳　高見石 | 石原 | 17 |
| 9月 | | | |
| 8日 | 葦毛湿原　神石山 | 山田(和) | 7 |
| 22～23日 | 八風山　荒船山 | 芹沢 | 7 |
| 29日 | 乾徳山 | 沢野 | 8 |
| 10月 | | | |
| 6日 | 矢倉岳　（本部合同） | 芹沢 | 17 |
| 11月 | | | |
| 3～4日 | 北ア　湯沢　ｻﾞｲﾃﾝｸﾞﾗｰﾄﾞ　屏風の耳 | 星野 | 5 |
| 9～10日 | 十枚山と南部氏発祥の地　史跡巡り | 鎌田 | 13 |
| 17日 | 大楠山 | 芹沢 | 15 |
| 24日 | 浄発願寺奥の院　日向山 | 祖父川 | 8 |
| 12月 | | | |
| 7～8日 | 西伊豆　大峠　雲見温泉　忘年山行 | 熊谷 | 20 |
| 15日 | 真富士山 | 小池 | 11 |
| 平成4年 | | | |
| 1月 | | | |
| 11日 | 逗子　二子山　畠山 | 石原 | 16 |
| 26日 | 権現山 | 小池 | 9 |
| 2月 | | | |
| 9日 | 箱根　駒ケ岳　神山 | 台 | 10 |
| 15～16日 | 北八ツ　高見石　白駒池　縞枯山 | 高橋 | 10 |
| 23日 | 曽我梅林 | 石原 | 16 |
| 3月 | | | |
| 1日 | 三浦半島　小網代の森 | 芹沢 | 14 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 8日 | 大山　高取山　聖峰 | 祖父川 | 9 |
| 15日 | 田谷の洞窟　玉縄城址 | 熊谷 | 13 |
| 28～29日 | 蓬莱寺山　明神山 | 沢野 | 13 |

## 合計山行回数　３３回
## 参加者　４０８名

あとがき

私の手元にＮＯ２４８号～４０２号までの支部会報があり、私の山歴ともいえる宝であり、折りにふれ読みかえしては懐かしんでいます。

当時はほとんど日帰り山行で、山を降りて反省会など無く、また例会の後にお酒を飲むこともなかった。唯ひたすら山を登ることに専念していた。

初めての１泊山行で、有名な温泉場に下りせっかく来たのだから、温泉に入って食事をしようとの提案があったが返事がなく、結局Ｙさんが「女の人５00円出してあとは俺が持つ」　Ｙさんは大変な出費だった。

今は考えられない程豊かになったし、贅沢に慣れてしまった。

あれから随分人も変わり、山行も変わってきたような気がする。山行も毎週あり、参加者も多くなり支部の発展は驚くばかりです。

３５年の長い間　先輩から後輩に引き継がれてきた、良き伝統をこれからも守り、横浜支部の益々の発展を願っています。

今までの支部の活動など知らない方が多いと思い、熊谷支部長と話し合い山行記録をまとめて見ました。創立から昭和５４年までの記録は支部長が調べてくださいました。古いことなので大変だったと思います。

それにしても支部長は役目上仕方ないとして、Ｉさん　Ｓさん達の山行係の多さ、思えば随分お世話になりました。有り難うございました。

なにかのｺﾏｰｼｬﾙに《男は黙って勝負する》係りの共通点は不言実行型ですネ

こうした陰の力に支えられて、横浜支部の発展があると感謝しております。

これからは益々高齢化が進むことでしょう、山行の在り方も変わってくると思いますが、健康に留意しお互い、譲り合い助け合って、いつまでも楽しい山登りが出来ますよう願っております。

（K）

## 「あとがき」にかえて

「歯朶」はそもそも、何時からどんな形で発行されたか、我が横浜支部で現存する最も古い会員で、支部の化石とか、シーラカンスと、畏敬と信頼をこめて尊称するMさんにお聞きすると、少しは分ると思いますが、今残っている資料によると、昭和33年９月に第１号を出す予定で、原稿募集を行っています。

それから34年10月28日の「お知らせ」で第５号が配布されると報じています。「支部ニュース」第１号が34年11月の発行ですから、それ以前に「歯朶」は第５号まで発行されていたのです。私が入会した直後に、25号が発行されていますから、会の創立から17年間に「歯朶」が、なんと25回も発行されていたのです。この頃は、会員も20台の若い人達が主体で、山行も「歯朶」の発行も精力的に行っていたと想像されます。

それに引きかえ26号以降は、日本経済も高度成長期を迎え、誰もかも忙しく、馬車馬のように働いた時期で、「歯朶」の発行までは手が回らなかったのか、57年に第26号、59年27号、平成元年28号といったスローペースで、今度４年ぶりに第29号が出来ました。27号までは謄写版（ガリ版）刷りで、製版も製本も決して上出来とは言えませんが、素人の手作りの温もりみたいなものが感じられて、いとおしくさえ思われます。28号からはワープロで製版され、読みやすさや、体裁の点では大きく変わりました。

皆さんから寄せられた原稿を読んでみて、支部に対する期待や、苦しかった山行も、年月のフイルターを通して、楽しく蘇らせてくれる文章など、「新ハイ」誌に出しても恥ずかしくないものばかりです。

今号は特に支部の歴史のようなものをと思い、略年譜と昭和48年度以降の支部山行記録を載せてみました。昭和55年度から平成３年度の11年間の資料は星野喜美子さんの労作です。星野さんに尻を叩かれて、その前の昭和48年度から54年度までの７年分を私が纏めてみました。若し又、機会を与えられるならば、今度は支部創立からの山行記録を完全に近い形で、作ってみたいと思っています。

尚、今回は印刷と製本は、岩方美津子さんのご好意により、三洋製版印刷（株）にお願いしました。末筆ながら、お礼申し上げます。正直いって疲れました。この小誌に対する率直なご意見と、ご感想をお聞ききしたいものです。そして発刊のあと小さな居酒屋で出版記念のささやかな祝杯をあげたいですね。

（平成５年２月28日・熊谷）

## 「しだ」の由来

ＳＨＣ横浜支部の部報「しだ」の由来は、当支部設立者の一人である、浜野　条治氏によって命名された。

これは「しだ」の研究家“沼方東行”氏を友人に持つ浜野氏も、しだの愛好家で、山旅の度に「しだ」を集めていた、これにあやかって「しだ」とした。（昭和48年１月10日）

★平成４年度　支部委員★

| | | | |
|---|---|---|---|
| 支部長 | 熊谷　松治 | 副支部長 | 長谷川美江 |
| 委　員 | 横山　勝利 | 委　員 | 台　昭二 |
| 〃 | 北村　襄 | 〃 | 山田　和子 |
| 副支部長 | 芹沢　隆久 | 〃 | 小池　廣治 |
| 委　員 | 沢野　正明 | 〃 | 頼角　幸子 |
| 〃 | 石原　弘之 | 〃 | 西口　房子 |
| 〃 | 平沢　隆雄 | 〃 | 浦田　節子 |


歯　　朶（ＳＨＩＤＡ）第２９號

平成５年（１９９３年）３月１０日　発行

編集・発行者　熊　谷　松　治

発行所　〒232 横浜市南区六ッ川４－１１３９

熊谷松治方　☎045-823-7410

新ハイキングクラブ　横浜支部